

日本家政学会
被服構成学部会誌

第27号

平成18年3月

目 次

・ごあいさつ	1
・次期部会長あいさつ	3
・平成 17 年度総会	
プログラム	5
基調講演「高齢になるとは、障害をもつとは」	6
・平成 17 年度研究例会	
プログラム	7
講演 1「日本のアパレルの現状」	7
講演 2「ヨーロッパのオートクチュールとプレタポルテの現状」	8
研究事例報告「高齢者の生活をサポートするファッション」	8
・第 3 回海外研修報告	
第 3 回海外研修を終えて	9
カニユ博物館&シルク工房	9
リヨン織物歴史博物館&装飾芸術博物館	10
写真ページ	10
リヨン繊維化学技術大学	11
フランス繊維アパレル研究所	12
パリ市内視察	12
クリスチャンディオール美術館	13
2005 パリプレタポルテ展示会	14
コモ湖畔の織物染色工場と絹教育博物館の見学	15
アパレルメーカーとレザーファクトリーの視察	15
・2005 SEOUL International Clothing and Textiles Conference	
日本側実行委員長として	16
参加者として	17
・第 13 回アジア地区家政学会議 (ARAHE) に参加して	18
・TX 記念 第 6 回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	19
・平成 16 年度科学研究費による公開講座「楽しさと感動を呼び起こす布を使ったものづくり」	
プログラム	20
はじめに	20
講座内容	21
参加者アンケート結果	21

・関連学会短信	
第7回国際ファッション工科大学連盟国際会議	22
日本人間工学会 関東支部第35回大会	22
服飾文化学会 第6回総会・大会	23
日本官能評価学会第10回記念大会に参加して	23
・平成17年度 修論・卒論・卒研テーマ	24-27
・会務報告	
庶務・会計	28
平成15年度収支決算報告	29
平成16年度予算	30
平成16年度収支決算報告	31
平成16年度夏期セミナー収支決算報告	32
平成17年度予算	33
・お知らせ・新入会員	34
・ご案内	35
・被服構成学部会部会規約	36
・平成17年度 会員一覧	38
・平成16・17年度役員 平成18・19年度役員	40
・入会申し込み書	41

ごあいさつ

(社) 日本家政学会被服構成学協会
部会長 大村 知子(静岡大学)

花の便りの届く候となりましたが、部会員の皆様にはお忙しくご活躍のことと存じます。

平成17年度被服構成学協会の諸行事も広島で開催の公開講座をもって終了します。部会長の重任を終えるにあたり、2年間、運営委員および部会員をはじめ多くの皆様のご支援とご協力を得て、部会の事業を進めることが出来ましたことを心より感謝申し上げます。この間、公開講座は一昨年から引き続き3年連続して科研費研究成果公開促進費が交付された結果によるものであり、関係された各実行委員の皆様のご尽力は多大でした。高校生初め参加者が被服学を一層理解し、関心をもつきっかけになり、物づくりを好きになっていただく絶好の機会になったものと信じております。連続して科研費交付が実現出来たことは、10年以上も前から被服構成学協会独自に公開講座を開催してきた先輩方の先見性にご努力の賜物です。この経緯を大切にすするためにも、今後各地の部会員から「当地でも開催を……」と、名乗りを挙げていただき、各地域を巡回する公開講座が継続して開催できれば被服構成学協会ならではの事業になると思います。

また、後援・協賛してきた全国中学生ものづくり競技会は、4回目の今年度から場所を筑波に移しましたが、今年度も被服製作コンテストの審査に関わり、被服構成学協会奨励賞を授与しました。

平成17年8月18～21日開催された日韓被服学合同セミナーには多くの部会員が参加して、研究発表をされました。8月末から9月初旬に実施した第3回海外研修ではリヨンとパリ（仏）そしてミラノとフィレンツェ（伊）を訪れて、国際的視野にたつ被服構成学の研究・教育のニーズについて実感し、新たな視点が広がったことと推察しております。

2年間の研究例会や夏期セミナー、海外研修など被服構成学協会の活動を示すキーワードをあげるならば、ユニバーサルデザイン・ものづくり・国際化などがあげられると思います。これらを受けて、18年度の家政学会大会では、部会としてシンポジウムを企画いたしました。この企画には色彩・意匠学会が協賛しますので、互いに忌憚のない意見交換を期待いたしています。

一方、昨年度から懸案の「被服構成学協会のロゴ」を公募するという企画は実現までに至りませんでした。次期委員会に引継ぎたいと思います。

26号よりA4版に変更した被服構成学協会誌は、初年度の反省をふまえて本年度の編集をいたしました。本号には、過年度の会計報告が掲載されていますが、従来、部会会計は、学会本部とは全く切り離したものでしたのに、平成16年度末になって突然本部から報告を求められ、かつ費目、科目などの統一を求められたことから、前号に掲載できなかったために、本年度は複数年にわたる掲載になったという事情によります。どうぞ、ご理解のほどお願い申し上げます。

変革の波が押し寄せている各大学では被服学関係の学科・科目の存続が問い直されているなど多くの障壁が立ちはだかっている状況が伝わってきます。学習指導要領の見直しも具体化している折、部会員の皆さまが独自の視点から研究を遂行されて、この分野の研究・教育の意義を広く発信して、さらに発展することを願っています。

2年間微力な部会長への皆さまのご支援とご協力を本当にありがとうございました。

次期部会長あいさつ

(社) 日本家政学会被服構成学協会
次期部会長 猪又 美栄子(昭和女子大学)

新学期を迎え、部会員の皆様には教育・研究に、お忙しくお過ごしのことと思います。このたび、平成18・19年度の部会長を務めさせていただくことになりました。微力ではありますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。副部会長の京都女子大学泉加代子先生、東京家政大学雲田直子先生、そして17名の運営委員の方々とともに部会の運営にあたらせていただきます。なお、おふたりの次期副部会長と相談をして、平成18・19年度の運営委員は庶務・会計・企画・広報・編集の担当を設け、それぞれの担当に各地域の運営委員に入らせていただくようにしました。

平成18年度の部会活動計画は以下の通りです。

5月の家政学会大会では被服構成学協会の企画として、平成17年度の大村知子部会長をコーディネーターとして「衣服のユニバーサルデザインを考える」のシンポジウムが予定されています。これは、平成17年8月に韓国ソウルで開催された国際被服学会議でトピックスとして行った「衣服のユニバーサルデザイン」を基に発展させたものです。

8月には総会と夏期セミナーを行います。既に、夏期セミナーについては雲田直子実行委員長を中心に準備を進めています。「被服構成学の研究・教育に生かすプレゼンテーション技術 Part2—動画を教材に取り入れよう—(仮題)」というテーマで、授業や研究成果のプレゼンテーションに動画を簡単に取り入れる方法や画像について学ぶことにしました。これは平成12年度に行われたプレゼンテーション技術に関する夏期セミナーの第2段といえます。授業に動画を生かしたパワーポイントを利用することにより、学生に授業に興味を持たせ理解を深めさせることができます。また、例えば縫製方法などの動画教材は、衣服製作実習の欠席者が自習するときに使用することができ、授業担当者の負担軽減にも役立つのではないかと考えています。部会員の授業や研究の事例報告も行う予定です。

後期には、例年のとおり研究例会を行います。また、平成14年度から行っている全国中学生創造ものづくり競技会への後援・協賛も引き続き行う予定です。しかしながら、平成15年度から17年度まで高部前部会長、大村部会長と実行委員の方々のご尽力で開催してきました高校生を対象とした公開講座については、平成18年度はお休みをさせていただきます。平成19年度については被服構成学協会の研究成果の公開について部会員の皆様のご意見を伺いながら、運営委員会で検討していきたいと考えています。

大学の被服学領域を取り巻く環境は大学により差がありますが、全体としては依然として厳しい状況です。このような状況から抜け出すには、社会で活躍できる人材や社会に求められる人材の育成が重要ではないかと思えます。ただし、大学や学部、学科によって教育の目標とする方向、学生の希望する職種・就職先や進学先は異なるでしょう。被服構成学協会が教育・研究で手をつないで、お互いに情報交換をし、その上で部会員それぞれの独自性を出していくことが被服構成学の発展につながるのではないかと思います。部会員の皆様、共に力を合わせて参りましょう。被服構成学協会が、ますます活発に被服構成学の教育と研究について意見交換し、協力しあって進められる場になるように願っております。

平成17年度 被服構成学協会 総会

プログラム

日時：平成17年10月30日（日）

会場：日本女子大学

平成17年度被服構成学協会総会は富田明美委員の司会で下記のとおり進行した。

- 1 開会の辞 猪又美栄子
- 2 部会長あいさつ 大村 知子
- 3 報告
 - (1)平成16年度事業報告 雲田 直子
 - (2)平成16年度科研費による公開講座報告
富田 明美
 - (3)平成17年度事業中間報告 大塚美智子
- 4 議長選出 堀尾 茂子
- 5 議事
 - (1)平成16年度会計報告 植竹 桃子
 - (2)平成16年度会計監査報告 林 隆子
 - (3)平成16年度夏期セミナー会計報告
千葉 桂子
 - (4)平成16年度夏期セミナー会計監査報告
金谷 喜子
 - (5)平成17年度予算案 植竹 桃子
 - (6)平成18年度事業計画案 雲田 直子
 - (7)名誉会員推薦の件 大村 知子
 - (8)次期部会長推薦の件 大村 知子
 - (9)平成18・19年度監事推薦の件
大村 知子
- 6 議長解任
- 7 次期部会長挨拶 猪又美栄子
- 8 閉会の辞 富田 明美

上記の内容について審議、承認された。



長谷川幹氏 基調講演の様子



研究例会 講演2の滝澤愛氏の講演風景



研究事例紹介 反射材織物を用いた作品

< 基調講演 >
「高齢になるとは、障害をもつとは」
桜新町リハビリテーションクリニック院長
長谷川 幹氏

講師の長谷川氏は「リハビリ医の妻が脳卒中になった時—発病から復職まで—」の著書で有名な医師である。主な著書には「発症部位別にみた脳卒中者のリハビリテーション—入院から地域連携まで—」、「寝たきりにさせない看護技術—急性期ベッドサイドから在宅までのリハビリテーション—」、「地域リハビリテーション—あせらずあきらめず—」がある。著書にある紹介文を引用すると「脳卒中患者のリハビリ生活を支え、社会復帰を目指すためには何が必要なのか？日本で数少ない専門クリニックを開設し、在宅を中心に医療活動続ける医師が、自らの体験をもとに医療者や家族の役割、地域社会でのサポート体制の必要性を説く。キーワードは、「あせらず、あきらめず、ゆっくりと」。

長谷川氏は30年前から整形外科を専門として医療に携わり、25年前からは「脳卒中」の専門家としてリハビリテーションを中心とした治療活動をおられる方である。今回の基調講演では、今まさに到来している高齢社会の大きな課題である「高齢者におけるリハビリの重要性」について、また、高齢者を支える家族の目線から「何が必要なのか」「何が大切なのか」について、さらにリハビリの一環として「衣生活の果たす役割の重要性」について、沢山の写真を交えながらわかりやすくお話いただいた。

内容は、①高齢者の身体特性 ②「脳卒中」や「脳性麻痺」、「パーキンソン病」などの身体麻痺を伴う病気の原因や症状 ③本人にとっても家族にとっても大きなとまどいをもたらす「中途障害」の心理面の変化、身体面の変化とその対応の3点である。

ここでは③の中途障害による変化とその対応について紹介する。長谷川氏は奥様の脳卒中に直面し、家族としてそのリハビリを支えられたご経験をお持ちである。発症したその日から本人も含め家族の生活が一気に変わり、「中途障害」であるという現実を受け

入れられるのに半年かかったそうである。身体が動かないという現実と向き合うことももちろんであるが、多くの場合に起こる記憶障害、失語症、構音障害などで今まで当たり前を取っていたコミュニケーションが取れなくなることは、本人と家族が向き合う現実を非常に厳しいものに行っている事を知った。また「病前の自分を基準にするのでいつまでも良くなる」という焦り、「自分が重症」だと思いつむ、「こんな惨めな姿を他人に見られたくない」と近所に出ることを嫌う、「家族の中で自分だけが障害者」という孤独感など、中途障害の難しさを深く考えさせられた。

そこで長谷川氏が考えたのが、まず楽しみを見つけて患者さんを外へ連れ出すことであった。患者さんが定期的に集まって交流できる場を設定することで障害者グループ作りを呼びかけた。活動が軌道に乗ると、レストランでの忘年会におしゃれをして集まったり、年に3回グループで歌舞伎鑑賞をする「歌舞伎クラブ」を作ったり、患者さん自身が講師となり病前に得意にしていた事を紹介するセミナー（元コックさんによる料理教室、趣味の写真教室と作品展など）を開いたり、夏には多摩川の河原でバーベキューをしたりと沢山のイベントを開いた。それまでなかなか出掛けることができなかつた人たちを楽しいイベントに誘い出すことでリハビリもすすみ、精神的な張り合いが生まれたという。また、それに伴って気づいたのが服装の変化であったようだ。イベントに出掛けるのによそ行きを着て髪型や化粧を整える人が相次ぎ、あまりの変身ぶりに車椅子が見えなくなるくらい圧倒された経験について話されていた。このように、服装の変化は表情の変化や意欲の向上とも連動していることを目の当たりにして、リハビリの中で衣服や身なりの果たす役割の大きさに認識を新たにされたそうである。最後に長谷川氏は「心の変化が衣服にも表れる」ことを日々実感されていると述べられた。衣服教育に関わる我々が、今後高齢社会の中で果たすべき役割の道筋のひとつを教えていただいた意義深い講演であった。

（記録 片瀬 眞由美）

平成 17 年度研究例会

<プログラム>

日 時：平成 17 年 10 月 30 日（日）

10：30～16：00

会 場：日本女子大学百年館 5F

502、503 会議室

【総 会】

10：30～12：00

基調講演「高齢になるとは、障害をもつとは」

桜新町リハビリテーションクリニック

院長 長谷川 幹 氏

12：00～12：30 総 会

【研究例会】

1 13：10～14：10 講 演 1

「日本のアパレルの現状」

(株) ノイバンシュタイン社長 斎藤 敬子氏

2 14：10～15：10 講 演 2

「ヨーロッパのオートクチュールと

プレタポルテの現状」

元ウンガロ所属、クチュール・アイ 滝澤 愛氏

3 15：10～15：30

コーヒーブレイク

4 15：30～16：00 研究事例紹介

生活安全保障セミナー「高齢者の生活をサポート
するファッション」の報告

ーファッションショーに用いた作品、

機能性素材などの展示解説などー

日本女子大学家政学部 大塚 美智子氏



<講演 1>

「日本のアパレルの現状」

(株) ノイバンシュタイン代表取締役 斎藤敬子氏

日本女子大の被服学科ご出身の斎藤氏が家業を継いで年商 20 億円の(株)ノイバンシュタインへと発展されたご経験を、現実の厳しい目と暖かい後輩へのエールを交えながら聞かせていただいた。日本のアパレルの現状について、従来のデザイナー中心の産業からファッションビジネスとしてのディレクター（経営者がその役を担っている場合が多い）が活躍する産業へと変化し、被服学科の卒業生が活躍できる、また活躍して欲しい場を提案された。同時に我々へは活躍できる学生を育成して欲しいと激励された内容でもあった。

I 日本のファッションビジネスの現状

これまでの川上・川下と呼ばれる原料・機屋・生地屋などは中国やイタリアなどの海外依存型になった。川下と呼ばれる洋服の形を作るアパレルから売り場である小売業でのファッションビジネスが中心に展開され、デザインした服を工場に生産依頼または自社の工場で作製、販売依頼までが経営者兼ディレクターの管理能力と手腕によるビジネス産業となった。生販一体型の SPA（製造小売業）が拡大し、物作りを商社や企画会社に委託する、服を作らないアパレル産業も出て、その弊害への反省の機運もある。

II 海外スーパーブランドのマルチメディア戦略

欧米市場を例に、従来の個々のスーパーブランドが合併・買収により、マルチブランドカンパニーを目指したビジネスの世界が展開され、日本進出も目覚ましいそうだ。トータルファッションをコーディネートし、販売する方向に発展している。

いまや服は創り作る品から感性企画商品へと変化している。服作りしない人の手に委ねられているのはファッションだけではない現状のようである。

(記録 増田 智恵)

<講演2>

「ヨーロッパのオートクチュールと

プレタポルテの現状」

Ai COUTURE 主催デザイナー 滝澤 愛氏

「ヨーロッパのオートクチュールとプレタポルテの現状」について、Ai COUTURE 主催デザイナー滝澤愛氏にお話頂いた。

オートクチュールとは、一人一人の顧客満足のために、受け継がれてきた技術、こだわりの素材を惜しげもなく使って仕立てられる高級注文服のことである。

しかし、オートクチュール組合の厳しい規則、湾岸戦争に伴うアラブ諸国の顧客の減少、注文から完成までのコストと時間が莫大にかかることから、オートクチュールから撤退せざるをえないブランドが相次ぎ、その実状は衰退していると言える。その様な現状を、滝澤氏はありのままにお話して下さった。

その上で、プレタポルテ（高級既製服）とは異なる伝統的な技法を、実際の服を提示しつつ丁寧にお話頂き、さらにオートクチュールコレクションの舞台裏の映像を見せて頂いた。

私にとって雑誌で見るオートクチュールの衣服は、とても華やかな、ひとつの芸術作品であった。しかし、滝澤氏のお話をうかがい、華やかなオートクチュールの世界の歴史と伝統、苦境に立たされる現状を知り、さらに、何世紀も前から変わらない技術が結集した実際の服を見せて頂いたことで、決して失ってはならない世界的財産であると感じた。

オートクチュールの技術とは、不変的に受け継がれていくべき技術であり、それは日本における伝統工芸的位置づけにあると思う。その一方で、ファッションの世界は、めまぐるしく変化する流行との戦いであり、今日オートクチュールは、時代に押し流されている状況にあるとも思う。この様な現状で、オートクチュールの伝統を継承し、守り続けていく滝澤氏のお話と技術に、実際に触れ合う機会が持てたことは貴重な時間となった。

(参加者の声 日本女子大学大学院生 福原衣麻)

<研究事例報告>

「高齢者の生活を

サポートするファッション」

日本女子大学 大塚 美智子

2005年7月16日に開催された生活安全保障セミナー『高齢者の生活をサポートするファッション』についての報告を行った。本セミナーは2部構成で、新繊維素材とパーソナル対応の衣服設計を中心テーマに2件の講演が行われ、その応用として、地域とともに発信するファッションショーが行われたが、研究事例報告はパーソナル対応の衣服設計とファッションショーについて行った。

講演では高齢者の体型特徴と既製服サイズの問題点を示し、大塚研究室で開発した高齢者ボディの特徴と開発の経緯について概説した。また高齢者の身体機能、装身心理とファッションの心理効果について老人ホームでの調査データに基づき報告した。さらに安全性の観点から薄暮時の見えのレベルを捉え、反射材や光ファイバーなどを用いた衣服によって夜間の視認性を高め、交通安全性を高めることの必要性を示した。

地域とともに発信する JWU シルバーファッションショー「グッドフィット・コレクション」では、開発高齢者ボディと新繊維素材を使った衣類をつくり、豊島一人暮らし研究会の高齢者の皆様と学内教授にモデルとして参加いただき、高齢者の体型をカバーする、健康を守る、安全を守る、身体にフィットする、動作を助ける、心を豊かにする、若々しく見せる、をテーマに、開発高齢者ボディと機能性素材を駆使した衣服デザインを提案した。



開発ボディと機能性素材（モルフォテックス）の作品

海外研修報告

第3回海外研修を終えて

海外研修旅行実行委員長

川村学園女子大学 田中 美智

第3回海外研修旅行は、前2回のアメリカからヨーロッパの地に移し、2005年8月30日から9月10日まで、2000年の歴史が培い脈々と伝承された文化を探訪する旅となりました。

研修旅行参加人数23名（内「リヨン・パリ」のみの研修者は10名）で実施されました。諸先生方による視察・見学先のご報告および、写真などからご想像いただけると存じますが、充実の内容と感動・感激の日々でございました。旅行出発直前に発生したイギリスのテロ事件を案じつつの出発となりましたが、相山女学園大学富田明美先生にお留守を託し、全員健康を害することなく有益な研修となりました。

終わりに当たり、ご関係各位にはお力添え賜わりましたことを感謝申し上げます。



リヨン旧市庁舎前広場での参加者集合写真



カニユ博物館

(海外研修報告の写真は、執筆者および東北生活文化大学 石井美奈子氏撮影による.)

「カニユ博物館&シルク工房」

京都女子大学短期大学部

渡邊 敬子

研修のスタートは、リヨンでした。リヨンは1436年に自由市の開催が許可され、絹織物の取引が発展、生産そのものも盛んになった街です。「カニユ博物館」は、ジャガードの工房跡です。ジャガード織はジャカールが考案したジャガード機を使用して製作される織物です。工房には絵画や写真のように奥行き感があり緻密な作品が展示してありました。この発明以前は、複雑な模様を織るには大人数で役割分担し、織機の上から必要な糸を持ち上げるなど大変な手間を要しましたが、この機械では糸を自動的に上下に開口することができるため手間が省け、複雑な模様が織れるようになったということです。しかし、実際に織るところを見ると、たくさんの色糸をそれぞれ織り込んでいくため気の遠くなるような作業でした。

市庁舎の近くの「アトリエ・ド・ソワリー」ではシルクスクリーンによるスカーフの製作実演と、パンヌ・デ・ヴルール（シルクスクリーン）の染色を見学しました。シルクスクリーンは、鉄の枠にテンガルという合成繊維を張ってプリントします。実演はある会社のプロモーション用の単色刷りのスカーフでした。あっという間に、しかも正確に刷られていく様子に職人の技を感じました。シルクスクリーンを何枚も使った多色刷りの技法も展示してありました。また、パンヌ・デ・ヴルール、つまりヴェルヴェットの浮き彫り模様のある白のシルクモスリンに染色を施している様子も見学しました。色は黒がベースでしたがオレンジや黄色など職人の感性によって刷毛で大胆に染色がされていました。

フランスのファッションを支えるテキスタイルの文化と技術に感激しながら、私は京都を思っていました。西陣はジャガードの技術を導入し独自の技術と文化を築いていますし、摺り友禅や型染めなどの高い技術もあります。これらを守り、さらに現代の社会の中で活かしていかなければと感じました。

「リヨン織物歴史博物館&装飾芸術博物館」

大妻女子大学 短期大学部

平井 郁子

リヨンの第1日目の午後、私たちはソーヌ川とローヌ川に挟まれた新市街地のシャリテ通りにある織物博物館と装飾芸術博物館を見学した。

織物博物館は1864年に芸術と産業の博物館としてリヨン商工会議所によって作られたものである。博物館の建物は18世紀のリヨン州知事の邸宅が用いられており、建物からも歴史の趣が感じられた。コレクションは、さすがに絹織物の町に匹敵するすばらしく、貴重なものばかりで、2000年以上の織物発展の足跡をたどることができた。コレクションは大きく東と西のカテゴリーに分けることができた。東の文明からは、コプト人のタペストリー、ササーン朝の織物、ビザンチン様式とイスラム様式の絹織物が目を引いた。特に私の印象に残ったのは大ホールに展示されていたアジア小民族のカーペットである。シルクロードを運搬されてきたものであろうが、アジアの力強さを感じた。西の文明からは、ヨーロッパの祭服、宮廷衣装の豪華さが当時の特権階級の生活を、まざまざと甦らせてくれた。

織物博物館に隣接している装飾芸術博物館は、時間の関係上駆け足で館内を見てまわった。足を止めてじっくり見学することができなかったのが残念であった。この博物館は、18世紀の邸宅のインテリア家具と内装品に14世紀以前からの古い織物が展示されていた。その他、15世紀と16世紀のイタリアマジョリカの陶器、ルネサンス時代のタペストリーや時計、金や銀の食器のコレクションも数多く展示されていた。日本の刀の鍔や印籠などの展示もあり、遠い日本からリヨンまでたどり着くまでの長旅に思いを馳せた。

もう一度リヨンを訪れるチャンスがあれば、今度はゆっくり一日をかけて織物歴史博物館と装飾芸術博物館を見てまわりたいものである。



リヨン織物歴史博物館



装飾芸術博物館



リヨン繊維化学技術大学にて



フランス繊維・アパレル研究所にて (P12 参照)

「リヨン繊維化学技術大学」

福井大学
服部 由美子

リヨン繊維化学技術大学 (ITECH) は、1899年に設立された民間の高等専門大学 (Grandes Écoles、グランゼコール) の1つです。高等学校卒業後バカロレア試験に合格し、準備クラスで2年間勉強したのち試験に合格すると入学できます。そして、3年間でエンジニアの資格 (Master degree) が得られます。2002年に、福井大学と学術交流協定を締結しております。

リヨン大学、同窓会、カトリック大学、商工会議所、市の代表者、地方の議会などからも加わり、理事会がどのような教育をするか、アドバイスを与えています。企業説明会や企業関係者の教育も行われ、エンジニアをいかに育てるかが一番重要なことです。

ITECHは、染料・インク・接着剤・化粧品などの化学関係、プラスチック関係、テキスタイル関係、皮革関係の4つの部門から構成されています。今回、私たちはリヨンから西 80 km (車で1時間半) のロアンヌ (Roanne) 市にあるテキスタイル部門を訪問させていただきました。テキスタイルがつぶれないように、市の方からアトリエを無料で提供するというので、1999年にこちらへ移ってきました。

学生数は1学年約100名に対して、テキスタイルの専攻学生は30名、専任教員は3名です。工業界など外部から講師を100名近く招き、常に新しいプログラムに心がけています。2006年には、医療用に使うテキスタイルの講義が予定されています。

3年のうち1年半は教養、1年半は専門を学びます。テキスタイルについて幅広く、いろいろな分野を学び、専門を絞っていくのが特徴です。カリキュラムには、物理、化学の他、糸の作り方、織ること、編むこと、不織布、染色、仕上げ加工、服をつくることなどが含まれます。新しい素材に対しては、何になるか、製品まで考え、それを使う分野があることを教えていきます。講義だけではなく、1つのテーマをもとにチーム

で課題を行う授業も100時間程度設けられています。例として“食いしん坊”をあげられ、食べたくなるような素材や臭いがしてくるような素材など、テーマからおもしろい素材が生まれます。

また、研究契約により企業で研修できるシステムになっています。研修は、学生自身が電話をかけるところから始めますが、6カ月の研修後に発表会が行われます。テクノロジーのコンペティション(コンクール)では、デザイナーと一緒にテキスタイルの新しい“革新”を行っています。今年のコンセプトは、まだ解決策は見つかっていないということですが、“織らない布地で、縫わない衣服”です。

就職率は100%ですが、50%は研修先で決まります。下着類、医療、スポーツ、車の内装関係などが主な就職先です。

その他、ジャカード織機や実験室などを見学させていただき、日本の大学と特に大きな違いは感じられませんが、現場に近い設備を導入して教育が行われている様子をうかがうことができました。

素材開発におけるテーマのを見つけ方、機能性以上にデザインが重要であるという考えからデザイナーとの協力、インターンシップ制度の導入など、テキスタイルの専門家を育成するための教育方針は大変参考になりました。

最後になりましたが、ロアンヌ校をご案内下さいました部門長のChristine Corroy博士と国際広報担当のNatalie Pintonさんには、心温まるおもてなしを受け、充実した時間を過ごすことができました。感謝申し上げます。



ロアンヌ校にて

「フランス繊維・アパレル研究所」

(IFTH = Institute Francais Textile-Habillement)

東京学芸大学 鳴海 多恵子

IFTHはリヨン郊外のEcullyにある国立の研究所である。広々とした敷地の中に、複数の研究組織が点在している環境にある。研究所では、まず、Branch Directorの説明を受けた後、研究者の方々による研究施設の案内を受けた。見学した研究室の中は撮影が禁止され、研究上の情報漏洩に気を配っている様子であったが、質問には十分に回答して頂けた。しかし、事前には繊維・アパレル産業と密接に連携し、技術開発やマーケット開発を行っているとの案内があったが、実際には、現在、それに関する研究者はいないとのこと。頂戴したパンフレットにも「Appre1」の頁があっただけに、私たちの関心事である「アパレル産業との密接な連携」に関する情報を吸収できなかったことは残念であった。研究施設としては、強靱なコードの開発、プラズマ処理に関する研究など繊維工学的な大がかりなもののほか、防炎加工、芳香性のパンティーストッキングの開発やサーマルマネキンを使ったスキーウェアの研究など、日本でも馴染みのあるものが参観できた。印象的だったのは、研究者のなかに深紅や黄色のウェア（作業着）があったこと。私は日頃の実験には「白衣」と疑問も持たず着用しているが、ここでは、研究部門によって色を違えており、深紅のウェアは防炎性に関する実験者とのこと。さすがおしゃれの国、と納得した。



フランス繊維・アパレル研究所の前で

「パリ市内」視察

東京田中短期大学

小田巻 淑子

私達は、中世の面影を残すリヨンから、TGV（新幹線）で3時間余、のどかな田園風景をぬけ、パリ・リヨン駅に到着。なぜリヨンが付くのかとの疑問にガイドから「行き先が付いている」と説明があり、確かに判り易いと納得した。午後からはルーブル美術館の見学。30年前、初めて訪れた時の重厚で静かな雰囲気とは異なり、ガラスのピラミッドの入り口ホールを中心に人々で賑わう明るく近代的な空間へと様変わりしていた。革命200年祭にあわせて計画されたピラミッド建設を巡っては、賛否両論の物議をかもしましたが、当初の目的どおり多くの観光客の受け入れを可能にし、今やエッフェル塔と同様にフランスの近代的な顔と歴史を象徴しているようで、時の流れを強く感じた。また、モナリザなどの展示室が日本テレビの資金援助でモダンに改装され、この4月にオープンされたばかりと聞き、とかくエコノミックアニマルなどと批判されがちな日本人としては、大変嬉しく思った。次に訪れたのはパリ発祥の地、シテ島に建つノートルダム・ド・パリ大聖堂。荘厳な佇まいは変わる事なく、観光客で賑わう広場には美しいタイルモザイクが埋め込まれていた。今回初めて、それがフランスの距離の0地点である事を知った。日本にとっての日本橋と同様、ノートルダム・ド・パリ大聖堂がフランス人にとって大切な場所なのだ、改めて感じた。市内を視察中、セーヌ河岸にダイアナ妃を悼む献花台があり、こんな狭い道路で猛スピードで事故が起きた事が不思議に思え、今も花束が絶えないとの話には胸を打たれた。最後にパリらしいファッションエピソードを紹介する。サントノーレのランジェリー店でブラジャーを購入されたH先生のお話。対応の店員は一目見ただけでサイズを見極め、さっと二つのデザインを出し試着の結果、的確さと、そのプロ意識に感心したそうだ。被服教育に携わる私も、かくありがたいものと思った。

「クリスチャンディオール美術館」

—生誕100年記念展覧会を訪れて—

日本女子大学 大塚 美智子

パリ2日目、9月3日はクリスチャンディオール生誕の地ノルマンディーのグランビル、クリスチャンディオール美術館へ。2005年はクリスチャンディオール生誕100年にあたり、彼の代表作品22点が、世界各地の博物館から集められ一同に会する記念展覧会の開催期に訪れる好機を得ることができた。

ソフテルホテルリブゴージュを朝7:30に出発し、地下鉄モンパルナス経由でパリ8:20発の列車TRAZN3413に乗車。11:30グランビル着を予定していたが、途中単線の駅で上り列車遅延調整のために約40分停車し、結局12:10にグランビル到着。グランビルに向かう列車から眺める風景は牛もまばらな牧場また牧場で、農業国フランスのスケールの大きさを実感させるものだった。脚の長い牛達に少々違和感を覚えつつ、のどかな田園風景を十分すぎるほど楽しむことができた。列車遅延によるロスタイムはランチの時間を短縮することで調整することとなった。

クリスチャンディオール美術館までは、花に飾られた洗練された家々と、ノルマンディーの海を見渡せる絶景。われわれを歓迎するかのようにすっきりと晴れ渡り、遠くショウゼイ島（御影石の島）を眺めることもできた。

途中、ランチは短時間ですませたが、HOTEL LA BEAUMONDERIEの海につながる庭園に面したレストランでいただいたフルーツのプロシエットと当地ならではのシールドはなかなかのものだった。

レストランから数分でディオール美術館に到着。ディオールは1905年に生まれ、翌年からこのグランビルに移り住んだ。父親が造園業を営んでいたこともあり、庭園にはとりわけ思い入れがあったようだ。

遠浅のノルマンディーの海を一望でき、色とりどりの花々や木々できれいに造園された庭園は、真の贅沢と豊かさを実感できる見事なもの。庭の随所にはディ

オールの香水の原点となる花々が植えられ、香りを楽しむことができた。

建築学を学んだディオールは、戦後Hライン、Aラインなどを次々に考案した。デザイナーとしての活動は1957年に52歳の生涯を閉じるまでのわずか10年間ではあったが、彼の作品はアメリカをはじめ世界的に高く評価された。

美術館の室内には1950年代のローブ、Barを中心にディオールの作品が展示されており、著名な作品の数々は親しみと懐かしささえ感じさせるものだった。

一階には彼の母親の衣服と彼の後継者ら、イヴ・サンローラン、ルイ・フェロー、ジョン・ガリアーノのタイユールやBarが展示され、それぞれのデザイナーの造形の中に脈々と流れるディオールの感性を垣間見ることができた。また、コクトー、ピカソ、ストラヴィンスキーなど才能ある芸術家達との華やかな交友関係をうかがわせる作品も展示されていた。

生誕100年のこの年にディオール生誕の地、グランビルを訪れたことは、この研修の大きな収穫だった。



ディオール美術館



庭園を散策

「2005 パリプレタポルテ展示会」

和洋女子大学
布施谷 節子

プレタポルテ・パリ 2006 春夏コレクションが、2005 年 9 月 2 日から 5 日まで、パリの南西部にあるパリ・エクスポート・ド・ヴェルサイユ見本市会場で開催されました。

今回の海外研修ではこの日程に合わせて、リヨンからパリに入り、9 月 4 日の朝早くから、当会場に向けてバスで出発しました。見本市会場は広大な敷地に多くの展示場が並び立っていました。プレタポルテの見本市会場はこの内の一つの広い展示場で開催されており、1 階から 3 階まで各階毎にブランドのブースが数百も並んでいました。

アパレル業界関係者ではない我々は、アパレルに将来従事する学生を養成する教育機関に所属するものとして入場が許可されたものと聞きました。入場チェックは厳しく、特にカメラの持ち込みは厳禁となっていました。1 階は入口受付で、ファッション関連の書籍の販売や飲食コーナー、新進のデザイナーの作品などが展示されていました。2 階でまず目を引いたのは、韓国の文化省と旅行業者の協賛で、韓国人のデザイナーによるハンボック（韓服）をデザインソースにした、新しいデザインの作品を展示した広い特別コーナーでした。ここでも韓国パワーを見せ付けられた感じがしました。2 階には非常に多くのブランドのブースがあり、衣服はもちろん、バック、アクセサリ、帽子、ベルトなども展示されていました。西欧のブランドだけでなく、日本をはじめアジアやインドのブランドも目につきました。2006 年春夏の流行は、2005 年に引き続き、エスニックで、ビーズやリボン、フリルなどの装飾が多く、ややグランジな印象を受けました。ファッションとしては面白いが、洗濯ができるのだろうか、体型への適合性にかけるのではないだろうかなどと、つい現実的なことを考えてしまいました。有力と思われるブランドでは、数人のモデルを使って、ミニ

ファッションショーをあらかじめ行っていました。また、コンピュータを使ってのデザインソフトのデモンストレーションコーナーにはいつも人だかりができていました。3 階はドレスやフォーマルなファッションが展示されていて、2 階とは違って落ち着いた雰囲気がありました。また、この階に設営されたステージでは 30 分ほどの本格的なファッションショーが行われていました。次々に登場するファッションに目を奪われながらも、一方でモデルさんの体型がとても気になりました。背が高く脚が大変長く顔が小さく細いことが、見せるファッションとしては大変重要だとよくわかりました。また、このショーの最中は文字をメモすることは許されていましたが、スケッチすること、イメージを描くことは禁じられており、違反者がいないかを会場係が厳しく監督しており、発見すると、直ちに客席に近づき、厳しい表情で無言のままノートなどを没収していました。ファッションアイデアの流出を防ぐ措置だと思いました。

どのフロアでも、ブランドの担当者とバイヤーとおぼしき人たちがなごやかに華やかに、でも厳しい目で商談をしている場面に数多く出くわし、ただ見学している私は何か申し訳ないような思いがしました。

今回のような得がたい機会に恵まれ、肌でファッションの最先端を感じることができましたことは、流行やブランドに疎い私ではありますが、この経験を授業の中やその他の機会を捉えて、少しでも学生に伝えたいと思いました。

展示場の見学は終日という計画でしたが、広い会場を回り、皆、大変疲れましたので、見学は午前中で切り上げ、会場を後にしました。



パリ ルーブル美術館研修

「コモ湖畔の織物染色工場と絹教育博物館」

京都女子大学

泉 加代子

9月6日午前中にミラノ市内のスフォルツェスコ城、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会、ドウオーモなどを視察したあと、ミラノの北約50kmのコモ湖畔へと向かった。コモは古くからシルクの産地である。

訪問した織物染色工場アキーレ・ピント社は、1933年にシルクの織物工場として設立されたが、その後コットンやウールに手を広げ、現在では染色とデザインプリントを伝統的な手法とデジタルな手法の両方で行っている。伝統的な手法は、1色につき1つのスクリーンを用い、1柄につき16～22色を使用する。デジタルな手法には、日本製の大型プリンタが活用されていた。どちらの手法も出来上がった製品はカラフルな美しい色彩でイタリアらしさを感じた。ピント社は、自社のオリジナルデザインだけでなく、アルマーニやベルサーチのデザインのプリントも手がけており、来年度のコレクションを製作中であった。ジャン・ピエーロ氏の説明で、約1時間暑い工場内を見学した後、隣接するショールームでのスカーフやネクタイの土産品の購入は楽しい旅の思い出の一つとなった。

次に見学した絹教育博物館は、蚕や桑の標本から仕上げ加工に至るまで、1800～1900年代の絹織物製造に使用された機械・道具類が沢山展示されていた。1870～1930年使用の撚糸機、1800年代後半まで使用のジャガード織機、第2次世界大戦後まで使用の自動織機などすべて実際に使用されていたものであり、中には世界に唯一の織機もあった。また、1900年代初頭の染色研究室が再現されており、染色の色見本や染色・プリントに使用されていた道具、糸・布の物性を測定する機器も展示されていた。サラさんから1つ1つについて詳細な説明を受け、リヨンで学んだシルクに関する知見をさらに高めることが出来た。サラさんが専任学芸員ではなく、コモ大学の学生アルバイトだと聞いて驚き、彼女の知識の深さに敬服した。

「ロンチ・ピエロ社、ピエロウッチ社」

—アパレルメーカーとレザーファクトリーの視察—

鹿児島大学教育学部 瀬戸 房子

ミラノ市のアパレルメーカーロンチピエロ社を訪問した。ここでは、コットン糸を使用し主にタオルの製造を行っていた。高さ2m、直径3m以上はあろうかという大きな編み機が設置され、パイル編みで1分間に糸10kgが筒状に編み上がっていた。また、コットン糸90%、スパンデックス10%の組成で、別の種類の編布が編まれていた。このセクションには種類の異なる数台の編み機が設置されていたが、それらを5人のスタッフで管理しているとのことだった。一通り工場を見学した後、ギャラリー兼ショップといった感じのスペースに案内された。そこには、ここで生産された色鮮やかで手触りのいい、薄手のTシャツ風のニット製品がきれいに畳まれて棚に並べられていた。一同は工場からギャラリーまで全ての見学を親切なロンチ社長に案内いただき、最後にオリジナルの素敵なノートまでいただいた。フィレンツェ市に入り、皮工場のピエロウッチ社を訪問した。ここではコートを始めとする衣料や手袋等の小物、バック、キーホルダー、ブックカバー等様々な皮革製品に関してプランニングから生産、販売まで行われていた。材料には、牛革、ダチョウ、子牛等様々な皮革を用い、流れ作業でひとつひとつ丁寧に手作りによる生産が行われていた。プランニングの段階ではデザイナーが型を起こし、まず、厚手の布で試作品を作り、そのデザインや機能性を確かめた上で製品が作られるのだそうだ。工場ではバックの製作が行われていたが実際に布の試作品を見ることができた。また、この道22年というベテランの職人のミシンによる縫製作業を見学し話も聞くことができた。バックは1シーズンに約30型を起こし昨年は約4000個を生産したとのことだった。工場見学の後、ここで作られた製品が陳列された広いショップに案内され、製品の種類の多彩さに驚かされた。

2005 SEOUL International Clothing and Textiles Conference

日本側実行委員長として

実践女子大学 高部 啓子

韓国衣類学会と(社)日本家政学会被服学関係部会連絡会との上記合同大会は、2005年8月18日(木)～21日(日)に韓国ソウル市漢陽大学で開催された。

本大会は5年前の2001年夏に当時の韓国衣類学会会長から日本家政学会への被服学分野における韓国と日本との合同大会を500名規模(日本から100名、韓国から400名)で開催したいという呼びかけに始まった。当時の日本家政学会理事会では、家政学の一分野である被服学の合同大会に(社)日本家政学会としては対応できないとの結論に達した。

一方、被服学関係の部会は、それまでに合同夏季セミナーを2回開催し、お互いに連絡を取り合う必要性を感じ被服学関係部会連絡会という組織を残していた。家政学会理事会はこの連絡会へ韓国からの提案を検討するよう指示した。これを受けて、連絡会では事前に各部会で検討し、意見を持ち寄って決定することとし、2002年6月に会議をもち議論した。積極的賛成は被服構成学部会のみで、他の部会は積極的には賛成しないが協力はするというスタンスだった。また日本からの参加者は多く見ても40～50名位であり、それでよければ受けるとした。また実行委員長は、積極的な発言をした高部が引き受けることになった。

これらのことを韓国へ伝えた後、韓国の実行委員長がサバティカルで不在だったこともあり、何もないままに約1年が経過した。2003年春に韓国から日本側の要望を出すよう連絡が入った。そこで準備会で案をつくり第3回被服学関係部会合同夏季セミナー(2003年8月実践女子大学)時に部会長連絡会を開催し実施案を決定し、韓国へ連絡した。その際に各部会から1名ずつの実行委員会を立ち上げた。その後は数ヶ月に1回のやりとりや2004年8月の第20回国際家政学会議京都大会、ITAA年次大会などを利用して韓国とのコミュニケーションをとってきた。具体的なやりとりが盛んになったのは2004年秋頃からであった。

韓国衣類学会は1976年に創設された韓国最大の被服学関係の学会であり、4つの支部を持ち、会員数約2000名の全国組織である。またUSAのITAAとの合同大会も開催しており、USAに留学した経験のある会員も多い。今回の合同大会は、具体的な作業や予算等、全て韓国側でとりまとめた。日本側実行委員会には、できるだけ参加者が増えるよう広報活動すること、可能なFundを探ること、日本側の発表申し込みの受付と整理、受付後の諸連絡等が期待された。

2005年2月末に韓国で大会専用のHPを立ち上げた。研究発表申し込みは3月末締め切りだった。思ったより多くの申し込みがあり、実行委員一同胸をなで下ろした。しかしSpecial topics(STと略す)などの申し込みは皆無で、実行委員会から依頼するより仕方がなかった。今回のプログラムはITAAのスタイルに近い。日本からは、全体講演1件、ST2件、研究発表41件であった。また日本からの発表がある部門はすべて座長を出すように指示され、急遽参加の先生方に依頼した。Social activityの文化体験—韓服ときもの—ではNPOの協力および多くの先生方のご協力(説明文等の作成)を得た。先生方に心から感謝の意を表したい。

日本側のFundとして、日本学術振興会の二国間交流事業に申請を出した。このFundは両国が同時に同じ内容で申請し、両国の合同審査委員会で決定され、両国それぞれにFundが支給されるものである。幸い申請が採択され、無理をお願いした先生方に多少の気持ちを表すことができた。韓国側にもプラスになった。

本大会の参加者数は、当初予定していた500名には達しないまでも日本から約100名、USA、中国、タイ、フィリピン、カナダからも参加があり、韓国と合わせて総勢427名に達し、国際色豊かな大会となった。大変華やかで盛大な会であり、韓国衣類学会の元気さと産業界や官界との結びつきの強さを実感させられた。また、研究領域や研究体制の違いも大きかった。日本の被服学の今後を考えさせられると同時に、グローバルなコミュニケーションの必要性を実感した。

参加者として

福島大学人間発達文化学類 千葉 桂子

2005年8月18～21日に韓国ソウル市の漢陽大学で開催された国際会議に参加しました。テーマは‘ASIA, GATEWAY TO THE FUTURE’であり、世界へ向けてアジア（特に開催国である韓国の人々）のパワーの熱さを実感しました。大会の全容につきましては家政誌2005年12号に高部啓子先生他多くの先生方の詳細なご報告が掲載されていますので、是非ご一読されることをお勧めします。ここでは、不肖ではございますが初めて海外での学会に参加した者として感想や印象などを書かせていただくことをお許しください。

18日には歓迎レセプションが行われましたが、会場のロビーに足を踏み入れたところ、学生によるファッションデザインコンテストの作品の数々が展示されていました。テーマは「Air of Asia」多くの作品には韓国の伝統色やポシヤギと思われる伝統技法が使用されているながら“現代”の新鮮さが十分に醸し出されており、目を見張りました。自分の回りの日本の学生達を思い浮かべ、ライフスタイルの趣向は欧米にあり、彼らは「アジア」を忘れていてのではないかと思えました。世界の様々な分野でアジアの人材が重要視されている時代にあって、自らのポジションがどこにあるのかを自覚することは、様々なことにチャレンジするために不可欠ではないでしょうか。そのことを韓国の学生は理解や自覚ができていような印象を持ち、教育のシステムについても知りたいと思いました。

翌19日からは基調講演や研究発表が中心の日程でした。基調講演等においては、近年の韓国アパレル業界は従来の生産ラインの一部を担うだけではなく、オリジナルデザインによる付加価値の高いアパレル製品の生産をめざし、産官学ともにその発展に寄与している現状にあるということが述べられ、日本のアパレル産業のあり方、ひいてはそれを担う人材育成について考えるきっかけが与えられたように思いました。

私が発表したセッションは「Clothing Construction - Universal Design」で5件の発

表がありました。韓国におけるユニバーサル・デザインや高齢化社会への衣服の対応に関する検討の状況はあまり把握できませんでした。発表テーマを全体的に見ると、アパレル生産・技術やマーケティング、マーチャンドライジング関連が大変多く、先にも述べたように産官学の連携の強さが窺えました。また両国の文化体験のワークショップにおいては、思いがけず「韓服」を着装させていただくことができました。滞在している間に実際に街で伝統的なチマ・チョゴリを着ている人はほとんど見かけなかったように思いますが、涼しげな麻のブラウスとロングスカートの「生活韓服」（いわゆる現代的韓服）を着ている方が、立て膝で食事をされている場面を見かけました。おそらくチマのように胸部の上方で紐を強く結ぶことがないので着用が楽にでき着心地がよいものではないかと思われます。デザインは変わっても素材や色彩に伝統のエッセンスが伝えられているところに感心しました。2005年はちょうど日韓国交正常化40周年にあたり、このような国際会議が開かれたことは非常に意味のあることだと思います。私が住んでいる福島県でも国際交流事業の一環として韓国のデザイナーのアンドレ・キム氏によるファッションショーが行われました。その中で見た世界へ発信されるクオリティーの高いファッションにも感動しましたが、やはり実際に地を踏み文化に触れることによって、衣服を研究する意味がまたひとつ見つけられた気がしています。今回の経験を通じて、今後の学生教育や研究を広げていけるように模索したいと思っています。



(韓国・国立民俗博物館「チュモニとノリゲ」)

第13回アジア地区家政学会議(ARAHE)に参加して

実践女子大学 高部 啓子

第13回アジア地区家政学会議は、平成17年8月2日(火)～5日(金)にシンガポールのオーチャードホテルで開催された。大会テーマは、”Developing Values, Innovations and Enterprise in Home Economics” (家政学における価値、新機軸、事業の開発)である。ヨーロッパやアフリカ、アメリカを含む16カ国から440名の研究者が参加し、講演、カントリーレポート、シンポジウム、研究発表、見学会等が活発に展開された。ただし、要旨集は発行されずCDで配付され、プログラムや参加者名簿も手作りのような大変簡素なものであった。公用語は英語であり、英語が母国語でない参加者には要旨集がないことは情報不足になったと思われる。今大会はシンガポール家政学会とNanyang科学技術大学国立教育研究所との共催であり、中・高校生の参加が特徴的だった。歓迎レセプションでは各民族特有の楽器を使った演奏や踊りを、開会式でもライオンダンスや歓迎ダンスを演じ、大会テーマに絡めてか、インターナショナルマーケットにも出店していた。お菓子の実演販売や、作成したポーチや布の販売が行われた。教育の一環だと思うが、とても元気で人なつこく、可愛かった。

日本からの参加は、全体の約3分の1にあたる134名で海外から参加した国々の中で最大であった。研究発表に関しては、全体では口頭発表36件(日本からは6件)ポスター発表142件(日本からは61件)であった。日本からの研究発表は、被服学領域では無く、食物栄養学と家庭科教育学領域で半分強を占めた。被服学関係の研究発表は口頭発表2件(インド)、ポスター発表12件(韓国8件、台湾4件)と非常に少なかった。被服学関係の国際学会が韓国で開かれることが影響したかもしれない。口頭発表の一つはインドのAjrakhという伝統的版木染めについてGujarat州KutchのDhamadkaという所の職人へのインタビューから、デザイン、工程、染料、材料布における時代的变化傾向を見出したというDedhia氏のものだった。

他の一つは、「エコテキスタイルへのロードマップ」という、Gautam氏とGoel氏の共同研究だった。エコテキスタイルとは、環境への負荷をできるだけ少なくして生産されたものと定義している。様々な例を引用し、環境にやさしい製品であると評価するための、ユニバーサルな標準づくりが急務であると結論している。環境問題は地球規模で関心が高まっていると感じた。この2件の要旨はA4用紙にそれぞれ16頁、18頁にわたって英文が詰まっていた。20分の発表にこれだけの量の要旨を書くエネルギーに感嘆した。

ポスター発表の方は、海草乳状液を用いた手染め皮革の摩損箇所の変退色と耐日光性に関する研究、古代エジプトからビザンチン帝国までの服装に現れた縁取り材料とベルトの研究、21世紀モダンファッションにおけるINDEファッションに関する研究、Tang and Song王朝における花の身体飾りの機能と材料選択間の関係分析の花教育への応用、婦人の服装に表現されたエロチシズムの変化に関する研究、LOHAS消費者のファッションスタイルに関する研究、韓国における人気スターのウェディングドレスデザインに関する研究、カジュアルシャツやドレスシャツの布に対する主観的好み、美容コースの指導における光の色の応用、イメージ処理システムによる美容スタイリングデザインの教育、韓国男女学生の被服行動と被服消費パターンの移行、モダンニットウェアデザインに表現された形の変化に関する研究であり、実験的というより文献研究が多く見られた。このほか被服学に関するものとしてはカントリーレポートで、台湾から「台湾におけるブライダルとウェディングビジネス」という報告がなされ、被服学分野が参入しうる新たなビジネスの可能性が述べられた。本会議では被服学関係の内容は少なかったが、参加して、いろいろな国からの研究者の考えや意見を見聞きし視野を広められた。また次期会長(H18. 1-19. 12)には秋田大学の澤井セイ子氏が推薦承認された。

TX記念 第6回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告

実践女子大学 高部 啓子

(社)日本家政学会被服構成学部会として協賛している表記ものづくり教育フェアは、2006年1月21日(土)～22日(日)に茨城県つくば市つくば国際会議場で開催された。本大会にはTX記念がついた。これはつくばエクスプレスの開通を記念しての意である。昨年まで国立オリンピック記念青少年総合センターを会場としていたが、つくば市からの誘致運動が功を奏したようである。つくば市は最先端のものづくりのメッカとしての地位を確保すべく広報活動も積極的である。今年を含めて3年間はつくば市で開催が決まっていると聞いた。つくばエクスプレスを使うと秋葉原から終点つくばまで50分足らずで到着できる。駅から徒歩10分強に位置する本会議場は比較的行きやすかった。

つくば開催に当たって茨城県では、本大会に先立ち、2005年11月に小・中学生を対象とした県独自のものづくり教育フェアを開催し、下準備をしたほどの熱の入れようであった。今回のフェアは生徒作品コンクール、ものづくり競技大会(木工・被服・食物)、創造アイデアロボットコンテスト、パソコン入力コンクールに、体験セミナー、ものづくり展示、商品展示で構成されていた。ものづくり競技会では、3分野それぞれに選手ひとり一人の発表の場が持たれた。本大会の参加者は約5,500人だったという。年々盛大に大がかりになってきたように思う。

開会式には茨城県知事、つくば市長、文部科学省初等中等教育局課長と今までとは違う顔ぶれが登場し、元東大総長有馬朗人氏の記念講演「ものづくりとそれを学ぶ楽しさ」も行われた。閉会式での表彰も文部科学大臣賞、厚生労働大臣賞に加えて茨城県知事賞、林野庁長官賞、農林水産大臣賞が用意された。その他の表彰は部門ごとに行われた。食物関連では家庭科教育学会会長賞、女子栄養大学学長賞などが加わった。

また今年の特徴は、高専や大学のロボコンの実演やワークショップが開かれたこと、ホンダのアシモが開

会式前にデモンストレーションしたり、小さな飛行船が吹き抜けの会場に浮いていたり、ロボットが動いていたり、車の修理体験、レーザーによる印鑑の作成体験など最先端技術に触れられたこと、結城紬の織物体験、癒しのロボット、パロの展示、その他編み物、ロックミシンによる作品づくりなど、地域に根ざした産業や技術を含む非常に多様な体験セミナーや展示が用意されたことにある。参加した生徒たちは、競技会で競うだけでなく、日本の最先端の科学技術を垣間見ることができたと、実際にテレビで見たことのある生徒たちのロボットの仕組みについて説明を聞くなど、大変な刺激を受けて帰ったのではないかと思った。その他協賛企業による商品展示、地域の名産品などのブースも設けられ、付き添ってきた教員にも新しい知識の確保や教材の発見に役立ったのではなかろうか。

とっておきのアイデアハーフパンツの競技会は、今年は昨年より7名も多い23名の選手で競われた。男子生徒が2名、昨年度に引き続き参加した生徒が2名あった。今年はリバーシブルのジーンズ生地を使った生徒が多かった。また環境やリサイクルをテーマにした作品もあった。審査は中学校の現場教員、県教育委員会指導主事、ミシンメーカーソーイングアドバイザー、大学教員からなる6名の審査員で行った。文部科学大臣賞には長野県飯田市立鼎中学校牧野奈津美さん、厚生労働大臣賞には徳島県吉野川市立鴨島第一中学校井伊真広さんが受賞した。(社)日本家政学会被服構成学部会賞には栃木県真岡市立真岡中学校小林加奈さんが選ばれた。



受賞者の中学生

平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費研究成果
公开发表(B)による公開講座「布と糸と針を使った楽しいものづくり—創造性の育成—」
第 2 回公開講座 継承と新たなつながり

平成 16 年度公開講座 実行委員長
富田 明美 (相山女学園大学)

<プログラム>

1. 基調講演 10:00~11:10
「布と糸と針によるものづくり」
元広島大学教授 林隆子氏
2. シンポジウム 11:10~12:30
「ものづくりの要素と最新の動向」
コーディネータ 相山女学園大学 富田明美氏
 - ① 素材の要素から
福井大学 服部由美子氏
 - ② 道具の要素から
東京学芸大学 鳴海多恵子氏
 - ③ 技術の要素から
文化女子大学 佐藤真知子氏
 - ④ 製作法の要素から
大妻女子大学 金谷喜子氏
3. ワークショップ「たのしいものづくり」13:30~16:00
 - ①布を立体化する「埴輪ルックスカート作り」
和洋女子大学 布施谷節子氏
 - ②布を装飾する「ニードルパンチを使った
テキスタイル作り」
文化女子大学 渡部旬子氏、磯崎明美氏
 - ③布をつなぐ「ヨーヨーキルトを使った
ニューレトロなパッチワーク」
川村短期大学 高橋裕子氏
4. デモンストレーション「創造性の啓発」13:30~16:00
 - ①針を使って布を立体化する「ピン・ワーク」
相模女子大学 田中百子氏
 - ②糸とアイロンを使って布を装飾する
「プリーツ (pleat) 加工」
大妻女子大学 金谷喜子氏
 - ③ミシンを使って布をつなぐ「ニットソーイング」
名古屋学芸大学 白石孝子氏
5. 展示「布と糸と針が創り出すデザイン」実行委員

□はじめに

平成 16 年 8 月 4 日付で、平成 15 年度に引き続き、被服構成学部に文部科学省科学研究費補助金の交付決定通知が届きました。部会長大村先生ともども、「柳の下にどじょう」ではありませんが、2 年続いて交付されることは「まずない」と踏んでいましたので、すでに部会事業費の枠内で、切り詰めた予算の実施計画を立てていました。そこに、この朗報・驚きと感激、そして、そのあとから、責任の重さが「ずしり」と肩にのしかかってまいりました。補助金によって、予算的な心配はなくなりましたが、前年度の成果をいかに引継ぎ、開催地の特徴をどのように出し、よいかたちで次の開催地へ引き継ぐには・・・、様々な想いが巡りました。結果的には、参加者も多くなり、会員の学術研究活動の成果を発表するとともに、我国における中等教育の中で、時間をかけた「ものづくり」が軽減され、中・高校生の創造的なものづくり体験が極めて乏しい現状を側面的にサポートするという目的も達成できたと思われまふ。また、公開講座の継承と新たなつながりへの橋渡しの役割は、果せたと信じています。これも、それぞれの立場でご協力いただいた部会員の先生方のお陰と深く感謝いたします。

□公開講座概要

<開催日時と場所>

開催日時：平成 17 年 3 月 24 日 (木)

会 場：ウィルあいち (愛知県 名古屋市)

<プログラム>

プログラムは左の欄に示します。

<講師と実行委員>

基調講演をはじめ、各講師は前年度と同じ先生に依頼しました。これにより、実行委員会や講師との打ち合わせ会の開催を最小限にすることができました。

実行委員は、主に名古屋を中心とした周辺地区で固

めました。幸い、この地区には、被服構成学に関わりの深い先生方の集まり「中部被服研究会」があり、このメンバーの助けを借りれば、何とか実行できるという計算と読みができたことは、大きな力となりました。また、実行委員には、この中部被服研究会を利用して、公開講座に盛り込まれている「モノづくり」を事前に体験していただきました。講座の運営がスムーズにできた秘訣はこのようなところにあったのでしょうか。

<講座内容>

基調講演では、「布と糸と針によるものづくり」と題した被服という文化について、また、人が布・糸・針と関わりをもった起源から現代に至るソーイングと被服作りの技法について、さらに、無機質な現代に最も重要な創る楽しみと潤いのある生活について、学術的でしかも分かり易い解説がなされました。

シンポジウムでは、「ものづくりの要素と最新の動向」と題して、素材の要素から、道具の要素から、技術の要素から、製作法の要素からそれぞれ講演をいただき、この4名のシンポジストとコーディネータによる討論を通じて、布と糸と針によるものづくりの大切さが確認されました。

ワークショップでは、布を立体化する試み、布に装飾を施す技法、布をつなぐことによって平面から立体化することをそれぞれ実体験し、もののできる喜びとデザインすることの面白さを実感していただきました。世界一といわれる日本のものづくりの技術力継承への期待も広がります。

デモンストレーションでは、被服構成学部が誇る科学的な理論に裏打ちされた表現力と技術力が披露されました。布のもつ表現力、造形力を十分見ていただくことができました。

そして、講演会場の壁面には、講演者・中部地区実行委員の指導のもと学生が制作した作品が展示されました。中には、テキスタイルデザインからプリント、ディテールデザインからカットイング・縫製まで一人で手がけた作品もあり、まさに、布と糸と針を使った楽しいものづくりの展示であったと言えます。

<参加者>

参加者数は、高校生 39 名、高校教員 34 名、大学生 19 名、大学教員 18 名、一般 3 名、講師・実行委員 32 名の計 145 名でした。高校生の参加が多かったせいでしょうか。会場には、終始、感動の熱気が漂っていました。

<アンケート結果>

参加者に対するアンケート結果から、高校生、教員を含めた一般ともに満足度の高い公開講座であったことが確認できました。そして、講演と実習の二本立ての企画は特に好評のようでした。ワークショップに対しては、「時間を長くしてほしい」「2 講座を受けたかった」などの要望が多く寄せられ、ワークショップ人気がここからも伺えました。

口おわりに

いずれの企画においても、布と糸と針による創造の楽しさを再認識し、被服作りにおける科学的裏付けや合理性の理解を深め、高レベルの技術や最新機器によるものづくりを提案することができました。公開講座が、やがて我国の「ものづくり」を担うであろう高校生や大学生に、刺激とモチベーションを与えることができればと願うものです。



関 連 学 会 短 信

<国際ファッション工科大学連盟>

—第7回国際会議—

文化女子大学 佐藤 真知子

国際ファッション工科大学連盟<International Foundation of Fashion Technology Institutes, IFFTI、通称イフティ>は、第7回 IFFTI 国際会議・年次総会を、2005年10月31日～11月5日の会期で、文化女子大学で開催した。「グローバル化するファッション—ビジネスと教育における課題と展望—」を総合テーマとして、90名を超える国外参加者と一般・学内参加者140余名を迎えて以下の内容で開催された。

10/3 若手研究者論文発表：7件

11/1 年次総会、会員校活動報告、デザイン画コンテスト最終審査、会員校論文発表：ビジネス14件、教育2件

11/2 年次会議

セッション1：ビジネス「グローバル化するファッション」(株)エー・インターナショナルの三宅正彦氏による基調講演の他3件の会員校発表

セッション2：教育「日本におけるファッション教育システムの構築」文化女子大の大沼淳氏による基調講演の他3件の会員校発表

講演：コシバユウコ氏「日本人の感性とファッション」
キモノショー(十二単の着装実演)、晩餐会

11/3 文化ファッションフォーラム

パネディスカッション1：「地球環境時代のファッション」

パネディスカッション2：「先進技術はファッションをどう変化させるか？」

講演：田山淳朗氏「デザイナーの視点に立ったグローバルファッション」

他に、アパレル関連産業ハイテク機器展示(ブラザー販売(株)、JUKI(株)、(株)島精機製作所、東レ(株))や、東京発のファッション情報をグローバルに発信するため産官学が団結した「日本ファッションウィーク」が、本学会に会期を合わせて開催された。開催会場校としては、英語の表記、同時通訳の問題のほか、学園祭の同時開催もあり、無事終えることが出来て今はほっとしている。

<日本人間工学会>

—関東支部 第35回大会—

共立女子大学(非) 別府 美雪

日本人間工学会関東支部第35回大会が、2005年10月29日(土)、30日(日)に共立女子大学神田一ツ橋キャンパスにて開催された。両日あわせて会員、一般・学生あわせて約190名の参加があった。

両日でシンポジウム(2件)と研究発表(57件)があり、1日目には同時に卒業研究発表会が行われた。

衣服人間工学会(部会長 共立女子大学 間壁治子氏)は1日目に「国家レベルにおける人体計測に関わる諸問題」と題しシンポジウムを行った。

現在、経済産業省は“人間特性基盤整備事業”(2004年～06年度)として20歳から80歳代の男女約8000人の人体計測に取り組んでいる。そこで官の立場から経済産業省の諸永祐一氏、学の立場から奈良女子大学の今岡春樹氏、さらにSize Koreaについて東ソウル大学の崔景美氏氏の講演が行われた。

被服設計(モノづくり全般に言えることだが)のための人体計測は、3次元計測が主流となっていく中で、特に人間特性の活用を推進すべく、計測手法の確立や誰でも計測できるための簡易な手法の開発・精度評価そして利用しやすく十分な標本数のデータベースの構築などが重要な課題として取り上げられていた。ますます個々の人体形状に対応した製品作りが求められるということになりそうである。

研究発表では、分野が「衣服」「健康・動作・姿勢」「コミュニケーション」「高齢者・障害者」「交通システム」「設計・デザイン」「疲労・生体計測」「VDT」「筋活動」「ヒューマンエラー」「感覚認知」と多岐にわたっており、各分野で相互の意見交換が活発に行われていた。

卒業研究発表会も、先生方から貴重な意見がだされ、学生達の熱気で盛り上がっていた。



＜服飾文化学会＞ —第6回総会・大会—

鎌倉女子大学
長田 美智子

服飾文化学会第6回総会・大会が、2005年5月21日（土）、22日（日）に共立女子大学、神田一ツ橋キヤンパス本館を会場として開催された。両日あわせて会員、一般・学生あわせて約180名の参加があった。

1日目は口頭発表6件、特別講演「松方コレクション、17世紀のタピスリー修復について」講師 石井美恵氏（元メトロポリタン美術館染色品保存修復部特別研究員）、「日本のきもの歴史—小袖・きもの概要—」講師 長崎巖氏（共立女子大学教授）の2講演が行われた。その後、総会の後、懇親会が行われ、会員相互の交流が図られた。

2日目は口頭発表3件、展示発表11件が行われ、午後からは「特別展 共立女子学園コレクション 華麗なる装いの世界

江戸・明治・大正」展を泉屋博古館分館にて見学した。江戸時代から明治にかけての絞りや刺繍、友禅染などで美しく装飾されたきもの、蒔絵で豪華に彩られた調度類などを観賞し、当時の華麗な女性の装いに思いを馳せた。



「特別展 共立女子学園
コレクション 華麗なる
装いの世界 江戸・明治・
大正」展カタログ表紙

研究発表の分野は服装史、服飾美学、被服心理、リサイクル関連など多岐にわたり、活発な質疑が交わされた。作品展示発表はコンピュータによる織りやパターンの作成、とうもろこし繊維素材を用いた作品、絞り、カッティング、伝統文様を使って独自の工夫を加え、独創性のある作品など、学会の特色でもある実作品によるプレゼンテーションが行われ、限られた時間だったが、貴重な意見交換が行われた。

＜日本官能評価学会＞ —第10回記念大会—

昭和女子大学
猪又 美栄子

日本官能評価学会は創立10周年の比較的小さな学会です。学会のホームページでは、「官能評価は人の感覚を用いて物の性質や人の感覚そのものを研究する学問です」としています。第10回記念大会のシンポジウムの中での共立女子大学の小林茂雄先生のお話によると、日本科学技術連盟の官能検査セミナーが発展して日本官能評価学会になったとのことでした。大学生の時に研究室にあった「工業における官能検査ハンドブック（1962）」や「新版官能検査ハンドブック（1973）」を懐かしく思い出しました。学会HPの「官能評価とは」の最後には、「官能評価を学問として総括し、各分野の情報交換を深め、その幅広い応用について討議する学会を待望する声の高まりが日本官能評価学会を成立させたといえましょう」と書かれています（<http://www.jsse.net/index.html>）。

10回記念大会は平成17年11月11・12日に東京農業大学世田谷キャンパスで行われました。1日目に、特別講演、総会、シンポジウムが行われ、シンポジウムでは「感覚の相互作用」と題して、視覚と聴覚の相互作用、嗅覚と他感覚の相互作用、繊維素材の触感における触覚と視覚の相互作用についての講演と討論がありました。2日目は研究発表、記念講演、ランチョンセミナー（講演、料理の実演）がありました。研究発表の大部分が「食」に関連するもので、産学の共同研究も多く見受けられました。その中で、金沢工業大学藤田佳典氏らの「パッケージの効果とその改善に関する官能評価研究」が印象に残りました。パッケージを見てハンバーグを食べた時の評価とパッケージを見ないで食べた時の評価を分析して、パッケージの視覚情報の改善が食感、香り、味わいの評価に変化を与えることが可能であり、パッケージの潜在効果が示されたものです。衣服の場合はどうでしょうか。示されたブランド名で評価が変わるのでしょうか。

平成 17 年度 修士論文、卒業論文・卒業研究題目

- | | |
|---|---|
| 女子大学生の着物・和風に対する意識
福島大学教育学部家庭科 小沢美希
(指導：千葉桂子) | 中高年女性体型分析
—衣服裁断用ボディ設計にむけて—
大妻女子大学家政学部被服学科 嶋田有希子
(指導：松山容子) |
| 知的障害児の衣生活支援について
—カラー・コーディネートを中心に—
福島大学教育学部家庭科 菅村洋香
(指導：千葉桂子) | 現代女子大学生のファッション意識と
その類型的把握の試み
大妻女子大学家政学部被服学科 町田暁子
(指導：松山容子) |
| 女子中学生と母親のファッションに対する意識
福島大学教育学部家庭科 永井路子
(指導：千葉桂子) | 下着のファッションアイテム化に関する調査研究
大妻女子大学家政学部被服学科
杉浦一葉・中山美紀 (指導：松山容子) |
| セミフレアースカートの形状に及ぼす裏地の影響
埼玉大学教育学部家政教育講座 巴 真奈美
(指導：川端博子) | 現代日本人における着衣習慣の変化について
大妻女子大学家政学部被服学科 新井智恵美
(指導：松山容子) |
| 被服による自己呈示に関する研究
埼玉大学教育学部家政教育講座 平子絵里
(指導：川端博子) | メリー・ウォーリー著
「ファッションマーチャンダイジング」の考察
大妻女子大学家政学部被服学科 佐々木滋子
(指導：松山容子) |
| 衣服の”マス カスタマイゼーション”に関する
消費科学的研究
大妻女子大学大学院家政学研究科被服学専攻
下坂知加 (指導：松山容子) | パンツファッションにおけるシルエットディテールの時
系列分析 —1988 から 2003 まで—
大妻女子大学家政学部被服学科 原野 友
(指導：松山容子) |
| カジュアルコーディネートの制作
—異素材の組み合わせと体型へのカスタマイズ—
大妻女子大学家政学部被服学科 樋口佳世
(指導：松山容子) | 快適なかぶり式衿あき寸法の検討
東京家政大学家政学部服飾美術学科
中田菜穂子 (指導：岡田宣子) |
| ツーウェイジャケットとスカートの制作
—カジュアルからフォーマルまで—
大妻女子大学家政学部被服学科 加藤亜子
(指導：松山容子) | 履き物の歩容への影響
東京家政大学家政学部服飾美術学科
長野いずみ (指導：岡田宣子) |
| シルキーリボンのブラックフォーマルドレスの制作
—バッグを添えて—
大妻女子大学家政学部被服学科 藤野可奈
(指導：松山容子) | スリムパンツの動作適応性
東京家政大学家政学部服飾美術学科 吉浦涼子
(指導：岡田宣子) |
| 個人向けの靴の制作
大妻女子大学家政学部被服学科 森田めぐみ
(指導：松山容子) | ウエスト部の衣服圧と官能値との関係
東京家政大学家政学部服飾美術学科 黒澤典子
(指導：岡田宣子) |

- 身体シルエット評価に関する研究
東京家政大学家政学部服飾美術学科 村田春菜
(指導：岡田宣子)
- 衣服のバリアフリー設計のための
着脱動作に関する研究
静岡大学大学院教育学研究科家政教育専攻
生活科学専修 平林優子
(指導：大村知子)
- 主成分分析によるスカート形状の推定
—新繊維素材の場合—
日本女子大学大学院家政学研究科被服学専攻
福原衣麻 (指導：大塚美智子)
- ローライズパンツのはき心地に関する研究
静岡大学教育学部教員養成課程家庭科教育専修
山内幸恵 (指導：大村知子)
- コーディネートとしての
チェック柄の印象・嗜好評価
和洋女子大学家政学部生活環境学科 青山恭子
(指導：布施谷節子)
- 着衣の空隙量に関する研究—成人男子を対象として—
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
各務彩乃 (指導：富田明美)
- ゆかたの着付けの効果的な学習法について
和洋女子大学家政学部生活環境学科 伊澤 望
(指導：布施谷節子)
- 清掃スタッフユニフォームの改善に関する研究
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
鎌倉真美・横田由紀 (指導：富田明美)
- ジーンズ素材による下肢動作の三次元分析
和洋女子大学家政学部生活環境学科 佐藤亜季
(指導：布施谷節子)
- 足部の”冷え”とその対策に関する研究
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
片桐千絵・片山知佳 (指導：富田明美)
- 靴の違いによる歩行の三次元的解析
和洋女子大学家政学部生活環境学科
野澤美奈子 (指導：布施谷節子)
- 靴の型崩れが身体に及ぼす影響に関する研究
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
足立奈美・草野恵 (指導：富田明美)
- タイトスカートの丈の違いによる
下半身の見え方評価について
和洋女子大学家政学部生活環境学科 野村佑子
(指導：布施谷節子)
- アパレルの表現性
—谷崎潤一郎の小説「刺青」をデザインする—
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
大屋晴子 (指導：富田明美)
- 浴衣の着崩れについての研究Ⅱ
和洋女子大学家政学部生活環境学科 増田彩子
(指導：布施谷節子)
- ”雅”の表現—源氏物語絵巻から—
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
古川雅絵 (指導：富田明美)
- ファッションに関する若者のジェンダー意識
和洋女子大学家政学部生活環境学科
渡辺かおり (指導：布施谷節子)
- 布を折る
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
平野友栄 (指導：富田明美)
- 乳幼児用おむつの熱水分移動性能と温熱的快適性
横浜国立大学教育人間科学部家政教育講座
山岸千恵 (指導：薩本弥生)
- フラメンコ衣装への提案
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
中根ちひろ (指導：富田明美)
- 男子学生における片手でのボタンかけはざし動作の特性
上越教育大学生活・健康系(家庭)
高橋美登梨 (指導：佐藤悦子)
- ボディ・イメージ評価に対するアパレルの効果
椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科
寺西若奈 (指導：富田明美)

子ども靴の流通と購入の実態ならびに子どもの足の健康
—店頭販売・通信販売の問題点と子どもの足を取り巻く
現状—

金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科
アパレルデザインコース
岩井久実・田本久美・福岡優 (指導:片瀬真由美)

足の健康と靴の重要性—ドイツに学ぶ日本の靴環境—

金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科
アパレルデザインコース
中澤美佳・長江美沙子・門西南・渡邊志麻
(指導:片瀬真由美)

車椅子利用者に適したジーンズの機能性と

ファッション性の検討
—障がいを持った女子高校生の衣生活の現状と問題点—
大金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科
アパレルデザインコース 櫻井幸子
(指導:片瀬真由美)

ワーキングマザーのためのマタニティ・ウェアとベビー
用品—結婚・妊娠・出産・育児を充実させるために—

金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科
アパレルデザインコース
加藤麻貴・前川愛美子 (指導:片瀬真由美)

車椅子利用者のためのウエディングドレスの製作

京都女子大学家政学部生活造形学科
石井那津子 (指導:泉加代子)

特別養護老人ホームにおける男性への

ファッション・セラピーの試み
京都女子大学家政学部生活造形学科
長谷川里紗・三木舞子 (指導:泉加代子)

2つの特別養護老人ホーム入居女性に対する

ファッション・セラピーの事例研究
京都女子大学家政学部生活造形学科
飯塚妙子・加藤紗千・下西瑞徳 (指導:泉加代子)

ウォルト・ディズニー「美女と野獣」にみる

色彩の心理的効果
京都女子大学家政学部生活造形学科 松村広子
(指導:泉加代子)

女子大生と母親の着物に関する意識

京都女子大学家政学部生活造形学科 藤村友紀
(指導:渡邊敬子)

若年女性の肩部の3次元形状

京都女子大学家政学部生活造形学科
田中千尋 (指導:渡邊敬子)

現代に残る中世ヨーロッパの衣装に関する一考察

附:ウエディングドレスおよびゴシックドレスの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
臼井奈緒美・藤井亜梨沙 (指導:小田明美)

日本におけるウエディングドレスの変遷

附:ウエディングドレス制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
梶岡繭子 (指導:小田明美)

体型と衣服の関連性についての一考察

附:ウエディングドレスの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
河内映磨 (指導:小田明美)

ウエディングプランナーに関する一考察

附:ウエディングドレスの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
坂田恭子 (指導:小田明美)

乳幼児期の身体、および精神発達と被服の関連性に関する
一考察 附:幼児用フォーマルドレスおよびウエディ
ングドレスの制作

大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
谷口恵美 (指導:小田明美)

アンティークドールファッションについての一考察

附:ウエディングドレス制作、及びアンティークドール
サイズのウエディングドレス製作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
辻田ゆかり (指導:小田明美)

ウエディングベールについての一考察

附:ウエディングドレス及びウエディングベールの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
前川真貴子 (指導:小田明美)

ウエディングドレスについての一考察

—特にパンツスタイルを中心に—
附:パンツスタイルのウエディングドレス制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科 前田愛子
(指導:小田明美)

ウエディングドレスを美しく着こなすための一考察
—女子大学生のウエディングドレスに対する意識調査—
附：ウエディングドレスの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
牧野寛子 (指導：小田明美)

ブライダルウエディングのトータルコーディネートに関する一考察 附：ウエディングドレスの制作
大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科
松本綾子 (指導：小田明美)

化粧行動の実態とその心理的効果
—二世代間の比較—
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
加藤綾香 (指導：森 由紀)

中年女性からみた若い女性のファッション
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
田中瑠璃子 (指導：森 由紀)

化粧行動の低年齢化について
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
辻井彩子 (指導：森 由紀)

小・中学生女子のファッションに対する関心度
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
西巻 瞳 (指導：森 由紀)

ブラジャー着用による整容効果とストレス
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
三本亜美 (指導：森 由紀)

日本における女性用洋装下着の普及
甲南女子大学人間科学部人間環境学科 山口有美
(指導：森 由紀)

和装から洋装への移行期における衣生活の実態
甲南女子大学人間科学部人間環境学科
吉岡智子 (指導：森 由紀)

施設入所高齢者の被服製作
美作大学生生活科学部福祉環境デザイン学科
山本美幸 (指導：小山京子)

高齢者の被服に関する研究
美作大学生生活科学部福祉環境デザイン学科
横島さやか (指導：小山京子)

男物羽織を活かしたリフォームについて
県立広島女子大学生生活科学部生活環境学科
金元舞美 (指導：堀尾茂子)

子供服の袖山におけるギャザー分量について
県立広島女子大学生生活科学部生活環境学科
郷司直子 (指導：堀尾茂子)

歩行時の床反力・足圧に及ぼす床面硬さの影響
福岡女子大学人間環境学部生活環境学科
石丸 香・毛利祐子 (指導：山本昭子)

背面シルエット別にみたウレタンフォームマットの寝具としての評価 (その1)
福岡女子大学人間環境学部生活環境学科
伊藤由加・室岡枝里・山本康子 (指導：山本昭子)

背面シルエット別にみたウレタンフォームマットの寝具としての評価 (その2)
福岡女子大学人間環境学部生活環境学科
伊藤由加・室岡枝里・山本康子 (指導：山本昭子)



会務報告

1. 平成17年度会務報告

1) 事業報告

① 基調講演・総会

日時：平成17年10月30日（日）

基調講演 10:30～12:00

総会 12:00～12:30

場所：日本女子大学

② 第3回海外研修旅行

Aコース：平成17年8月30日（火）～9月6日（火）

研修先：リヨン・パリ

Bコース：平成17年8月30日（火）～9月10日（土）

研修先：リヨン・パリ・フレンツェ・ミラノ

③ 研究例会

日時：平成17年10月30日（日）

13:10～16:00

場所：日本女子大学

④ 文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費研究成果公表（B）による公開講座「布と糸と針が拓く未来—楽しいものづくり、創造性育成と技の伝承—」の開催

日時：平成18年3月25日（土）10:15～16:05

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

⑤ 全国中学生創造ものづくり競技会を後援・協賛

⑥ ホームページの維持管理

⑦ 部会誌27号発行

平成18年3月31日（金）

2) 庶務報告

第1回運営委員会

日時：平成17年5月29日（日）12:00～13:30

場所：中村学園大学

① 平成17年度事業計画について

・日韓合同セミナー

・第3回海外研修旅行

・平成17年度総会、研究例会

・公開講座

・物づくりフェア

② 平成16年度の収支決算について

③ 平成17年度予算について

④ 部会誌27号について

第2回運営委員会

日時：平成17年10月30日（日）9:00～10:00

場所：日本女子大学

① 平成17年度総会について

② 平成17年度研究例会について

③ 平成18年度事業計について

④ 名誉会員の推薦の件

⑤ 平成18、19年度監事推薦の件

⑥ 公開講座について

⑦ 部会誌編集について

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成18年度の事業計画

① 総会 平成18年8月

② 夏期セミナー 平成18年8月

③ 研究例会 平成18年12月

④ 全国中学生創造物づくり教育フェアへの後援

平成19年1月

⑤ 部会誌28号発行

平成19年3月

⑥ ホームページの維持管理

平成15年度収支決算報告 (H15. 4. 1～H16. 3. 31)

(1) 部会会計

(単位：円)

	費目	予算	決算	備考
収 入	部会費徴収	477,000	532,500	153名分
	その他の収	50,000	303,330	夏期セミナー余剰金取り崩し、ホームページ維持費残金等
	前年度繰越	133,988	133,988	
	計	660,988	969,818	
支 出	総会運営費	50,000	0	
	部会誌発行	100,000	100,380	部会誌印刷
	人件費	10,000	64,800	公開講座案内発送、授業実践集編集等
	会議費	40,000	160,968	運営委員会、公開講座実行委員会他
	庶務費	15,000	18,533	
	通信費	75,000	97,670	部会誌、公開講座要旨集、授業実践集送料他
	交通費	155,000	245,098	公開講座実行委員会、ものづくりフェア等
	事業費	215,000	282,369	研究例会、共同研究推進委員会出版事業、文部科学省研究費公開講座、ものづくりフェア
	予備費	988	0	
	次年度繰越金		0	
	計	660,988	969,818	

差引残高 ¥0

(2) 特別会計

活動基金 ¥1,880,547

(内訳) 前年度繰越金 2,087,104

本部会計へ 206,580

利子 23

成田基金 ¥345,218



(内訳) 預金 345,202

利子 16

会計監査の結果、上記事項に相違ないことを認めます。

平成16年 6月9日

会計監査

富山 絹江 
松山 容子 

平成16年度予算

(1)部会会計

	費目	本年度予算額	前年度予算額	増減
収 入	部会費徴収	400,000	477,000	-77,000
	その他の収入	0	0	0
	基金より	345,000	50,000	295,000
	前年度繰越金	0	133,988	-133,988
	計	745,000	660,988	84,012
支 出	総会運営費	100,000	50,000	50,000
	部会誌発行費	140,000	100,000	40,000
	人件費	30,000	10,000	20,000
	会議費	30,000	40,000	-10,000
	庶務費	15,000	15,000	0
	通信費	70,000	75,000	-5,000
	交通費	50,000	155,000	-105,000
	事業費	290,000	215,000	75,000
	予備費	20,000	988	19,012
	計	745,000	660,988	84,012

(2)特別会計

	現在高	支出
活動基金	1,880,547	345,000
成田基金	345,218	0

平成16年度収支決算報告(H16.4.1~H17.3.31)

(1) 部会会計

(単位:円)

費用		予算	決算	備考
収 入	部会費徴収	400,000	460,000	142名(184件)分
	その他の収入	0	19,400	テキスト販売、ものづくり競技会
	基金より	345,000	232,271	
	前年度繰越金	0	0	
計		745,000	711,671	
支 出	総会運営費	100,000	100,000	
	部会誌発行費	140,000	139,915	部会誌印刷
	人件費	30,000	0	
	会議費	30,000	41,980	運営委員会、海外研修打合せ
	庶務費	15,000	8,433	
	通信費	70,000	73,760	研究例会案内・部会誌発送等
	交通費	50,000	92,360	運営委員会、等
	事業費	290,000	231,253	研究例会、公開講座、 ものづくり競技会協賛・後援
	予備費	20,000	23,970	学会事務局へ消費税相当分
	次年度繰越金	0	0	
計		745,000	711,671	

差引残高

¥0

(2) 特別会計

活動基金

¥1,938,836

前年度繰越金	1,880,547
利子	22
夏期セミナーより	290,538
本部会計へ	232,271

成田基金

¥345,233

(内訳) 前年度繰越金	345,218
利子	15

会計監査の結果、上記事項に相違ないことを認めます。

平成17年5月9日

会計監査

島山 絹江 (島)

林 隆子 (林)

平成16年度 被服構成学部会夏期セミナー 収支報告

◆夏期セミナー

参加者	内 訳	人 数	備 考
	部会員	76名	この内1名は名誉会員で参加費免除
	非部会員	6名	
	学生	11名	この内1名は学生アルバイト、5名はモデル。これら6名参加費免除
	計	93名	

収 入	項 目	予 算	決 算	差引高
	参加費	650,000	部会員 (13,000×75)	975,000
			非部会員 (15,500×6)	93,000
			学生 (6,500×5)	32,500
			計	1,100,500
	計	650,000		450,500

収 支	項 目	予 算	決 算	差引高
	会場費	30,000	57,359	-27,359
	講師謝金	145,000	145,000	0
	要旨集代	130,000	105,000	25,000
	通信・輸送費	20,000	28,400	-8,400
	人件費	40,000	65,500	-25,500
	二日目昼食代	54,000	92,000	-38,000
	会議費	101,000	119,723	-18,723
	庶務費	30,000	30,035	-35
	交通費	100,000	116,220	-16,220
	消費税	0	50,725	-50,725
	計	650,000	809,962	-159,962

差引残高 ¥290,538

◆懇親会

参加者	内 訳	人 数
	部会員	51名
	非部会員	1名
	学生	2名
	計	54名

収 入	項 目	予 算	決 算	差引高
	懇親会費	135,000	部会員 (4,500×51)	229,500
			非部会員 (4,500×1)	4,500
			学生 (3,500×2)	7,000
			計	241,000
	計	135,000		106,000

支 出	項 目	予 算	決 算	差引高
	食事費	135,000	229,500	-94,500
	雑費	0	11,500	-11,500
	計	135,000	241,000	-106,000

差引残高 ¥0

上記事項に相違ございません。

平成17年3月10日

会計 植竹桃子, 千葉桂子

会計監査

芦澤昌子 (印)
金谷喜子 (印)

平成17年度予算

(1) 部会会計

	費目	本年度予算額	前年度予算額	増減
収 入	部会費徴収	400,000	400,000	0
	その他の収入	0	0	0
	基金より	1,000,000	345,000	655,000
	前年度繰越金	0	0	0
	計	1,400,000	745,000	655,000
支 出	総会運営費	100,000	100,000	0
	部会誌発行費	140,000	140,000	0
	人件費	20,000	30,000	-10,000
	会議費	45,000	30,000	15,000
	庶務費	15,000	15,000	0
	通信費	90,000	70,000	20,000
	交通費	300,000	50,000	250,000
	事業費	650,000	290,000	360,000
	消費税相当分	20,000	0	20,000
	予備費	20,000	20,000	0
	計	1,400,000	745,000	655,000

(2) 特別会計

	現在高	支出
活動基金	1,938,836	1,000,000
成田基金	345,233	0

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成 18 年度の被服構成学部の会費 2500 円は、5 月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00150-8-356080 (社) 日本家政学会被服構成学部の会費

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

和洋女子大学 衣生活研究室 布施谷節子 宛

TEL 047-371-2196 (ダイレクトイン)

FAX 047-371-1336 (代表)

E-mail fuseya@wayo.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒228-8533 神奈川県相模原市文京 2-1-1

相模女子大学 生活造形学科 田中百子宛

TEL 042-749-4908 (ダイレクトイン)

FAX 042-743-4717 (代表)

E-mail momo@sagami-wu.ac.jp

※ なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 18 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成 17 年度新入会員

瀬戸房子 (鹿児島大学) 田中由佳里 (夙川学院短期大学)

ご 案 内

平成 18 年度被服構成学部会総会ならびに夏期セミナー

開催期日 : 平成 18 年 8 月 22 日 (火)、23 日 (水)

会 場 : 東京家政大学 10 号館 4F 104B コンピュータ室、3F 103 講義室

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

総会・夏期セミナー “被服構成学の研究・教育に生かすプレゼンテーション技術 Part II”

—動画を教材に取り入れよう— (仮題)

プログラム概要

	8 月 22 日 (火)	8 月 23 日 (水)
午 前	講演「テーマ未定」 東京家政大学教授 松木 孝幸氏 総会	演習 II
午 後	授業・研究発表の事例報告 昭和女子大学 猪又美栄子氏 東京学芸大学 鳴海多恵子氏 横浜国立大学 薩本 弥生氏 東京家政大学 田中 早苗氏 演習 I 懇親会 東京家政大学ラウンジ	演習 III

※部会員には追って詳細をご案内申し上げます。

連絡先

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学 雲田 直子

TEL&FAX 03-3961-8283

E-mail kumoda@tokyo-kasei.ac.jp

平成 18 年度 (社) 日本家政学会第 58 回大会における部会企画

被服構成学部会 主催

色彩意匠学部会 協賛

開催日時 : 平成 18 年 5 月 28 日 (日) A.M. 10 : 50 ~ 11 : 50

会 場 : 秋田大学 G1 305 教室

シンポジウム「衣服のユニバーサルデザインを考える」

コーディネーター 大村 知子 (静岡大学)

シンポジスト 猪又美栄子 (昭和女子大学)

川上 梅 (東京家政学院大学)

芦澤 昌子 (青葉学園短期大学)

※併せて家政誌掲載の (社) 日本家政学会 第 58 回大会プログラムをご参照ください。

社団法人日本家政学会被服構成学部会 規約

- 第1条(名称) 本会は、社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条(目的) 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条(事業) 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条(会員) 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条(入会) 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条(退会) 会員が退会をしようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条(役員) 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監事 2名
- 第8条(役員を選任) 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長および監事は、運営委員会がこれを推薦し、総会で選任する。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条(役員任期) 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
2 役員再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条(役員職務) 役員職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表し、会務を統轄する。
 - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
 - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
 - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条(会計) 本会の会計は次のとおりとする。
- 1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。
 - 2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

以上

附則

1. この会則の改正は、総会の議決による。
2. 施行に関する内規は別に定めることができる。
3. この会則の施行は昭和 54 年 10 月 8 日からとする。
4. この会則の一部改正の施行は昭和 59 年 8 月 3 日からとする。
5. この会則の一部改正の施行は昭和 63 年 8 月 1 日からとする。
6. 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成 15 年 8 月 27 日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
7. この規約の施行は平成 15 年 8 月 27 日からとする。

社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務 3 名（1 名は部会誌編集担当）、会計 2 名をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第 9 条に従って部会長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、継続して 3 期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ 2 期 4 年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事
(1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

附則

この申し合わせは、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

1. この申し合わせは、平成 15 年 8 月 27 日から施行する。

平成17年度 (社)日本家政学会被服構成学部会会員一覧

○名誉会員

柳澤 澄子
石毛フミ子
高橋キヨ子
祖父江茂登子
増田 茅子
古松 弥生
三吉満智子
木岡 悦子
中保 淑子
永井 房子
松山 容子

○正会員

青山喜久子 (金城学院大学)
芦澤 昌子 (青葉学園短期大学)
我妻美奈子 (和洋女子短期大学)
石井美奈子 (東北生活文化大学)
石垣 理子 (昭和女子大学)
石原 頼子 (和洋女子大学)
泉 加代子 (京都女子大学)
泉山 幸代 (北海道浅井学園大学短期大学部)
磯崎 明美 (文化女子大学)
市岡 督子 (飯田女子短期大学)
伊地知美知子 (文教大学)
伊藤 瑞香 (和洋女子大学)
絲原 郁子 (島根県立島根女子短期大学)
稲垣 和子 (倉敷市立短期大学)
井上 尚子 (椋山女学園大学)
猪又美栄子 (昭和女子大学)
今井 慶子 (大谷女子短期大学)
今井 裕子 (広島文化短期大学)
岩佐 和代 (椋山女学園大学)
植竹 桃子 (東京家政学院短期大学)
牛田 聡子 (成安造形短期大学)
榎本 春栄 (和洋女子大学)
大江 迪子 (大谷女子短期大学)
大島 澄江 (佐賀女子短期大学)
太田 寿江 (名古屋文化短大)
大塚美智子 (日本女子大学)
大村 知子 (静岡大学)
岡田 宣子 (東京家政大学)
岡田 瑞穂 (仁愛女子短期大学)
岡部 和代 (京都女子大学短大部)
小川 秀子 (青陵女子短期大学)
奥 和代 (東京家政大学)
奥野 右子
奥村 堇 (滋賀女子短期大学)
長田美智子 (鎌倉女子大学)
小関 栄子 (愛知文教女子短期大学)
小田 明美 (大阪樟蔭女子大学)
小田巻淑子 (東京服飾造形短期大学)
檜本富美子 (奈良佐保女学院短期大学)
かせ村美江
片瀬眞由美 (金城学院大学)
加藤 千穂 (名古屋女子大学)
兼子 良子 (尚絅短期大学)
金谷 喜子 (大妻女子大学短大部)
金田すみれ (福山市立女子短期大学)
可部野和子 (金沢学院短期大学)
鎌倉 聡子 (飯田女子短期大学)
川上 梅 (東京家政学院大学)
河島 一恵 (共立女子大学)
川中美津子 (相愛女子短期大学)
川端 博子 (埼玉大学)
川畑 昌子 (大妻女子大学 (非))
菊永 典子 (就実短期大学)
菊藤 法 (京都文教大学)
喜多エイ子 (羽衣学園短期大学)
北浦多栄子 (九州女子大学)
木野内清子
雲田 直子 (東京家政大学)
小池美枝子
古賀寿美枝 (東京服飾造形短期大学)
後藤 喜恵 (名古屋女子大学)
小林美智子 (筑波大学付属坂戸高等学校)
小吹 史子 (文化女子大学)
小山 京子 (美作大学)
古山千佳子 (千葉大学 (非))
斉藤 秀子 (山梨県立女子短期大学)
櫻井 純子 (女子栄養大学)
薩本 弥生 (横浜国立大学)
佐藤 悦子 (上越教育大学)
佐藤 祝 (藤女子短期大学)

佐藤真知子 (文化女子大学)	鶴 静子 (佐賀短期大学)	堀田 延子 (平安女学院大学)
佐藤由紀子 (文教大学短大部)	土井 昭子 (日本女子大学)	本間小枝子 (跡見学園短期大学)
柴村 恵子 (名古屋女子大学)	徳久 光代 (神戸女子大学)	前原 優子 (安田女子短期大学)
嶋根 歌子 (和洋女子大学)	土肥麻佐子 (産業技術総合研究所)	間壁 治子 (共立女子大学)
清水 薫	富田 明美 (椋山女学園大学)	増田 智恵 (三重大学)
十一 玲子 (神戸女子大学)	豊田 幸子 (名古屋女子大学)	栴田 庸 (京都ノートルダム大学)
正地 里江 (東京家政学院短期大学)	豊田 智子 (東京医療福祉専門学校)	増田 依子 (大阪女子学園短期大学)
白石 孝子 (名古屋学芸大学)	鳥居本幸代 (京都ノートルダム女子大学)	松岡久美子 (実践女子大学 (非))
吹田 和子 (神戸松蔭女子学院短期大学)	中川 敦子 (ノートルダム清心女子大学)	松浦 禮子 (愛知女子短期大学)
末井美恵子 (比治山女子短期大学)	中川 尚美 (名古屋女子大学)	松本 敬子 (山陽大学短期大学)
菅原 正子 (岩手県立盛岡短期大学)	中西 正恵 (神戸女子大学)	松本 幸子 (東京家政学院大学)
菅原由紀子 (桜美林短期大学)	中野 慎子 (相愛女子短期大学)	村岡三喜子 (大手前女子短期大学)
杉田 明子 (平安女学院大学)	永野 順子 (和洋女子大学)	村田 温子 (三重短期大学)
杉田 洋子 (國學院大學栃木短期大学)	長野 智子 (昭和学院短期大学)	村木 順子 (広島文教女子大学)
杉野 公子 (杉野服飾大学)	中原五十鈴 (文化女子大学短大部)	森下あおい (成安造形短期大学)
杉本智枝子 (就実短期大学)	中舎 訓子 (愛知文教女子短期大学)	森 由紀 (甲南女子大学)
鈴木 明子 (広島大学大学院)	成田 千恵 (日本女子大学)	諸岡 晴美 (富山大学)
鈴木妃美子 (名古屋女子文化短期大学)	鳴海多恵子 (東京学芸大学)	山川 勝 (武庫川女子大学)
須田 佳子 (聖和学園短期大学)	西之園君子 (鹿児島純心女子短期大学)	山田 民子 (東京家政大学)
瀬戸 房子 (鹿児島大学)	西原 直枝 (日本学術振興会特別研究員)	山田千賀子 (池坊短期大学)
千田百合子 (市邨学園短期大学)	呑山委佐子 (大妻女子大学短大部)	山村 明子 (東京家政学院大学)
雙田 珠己 (東京学芸大学(院))	長谷川圭子 (箕面市立第一中学校)	山本 昭子 (福岡女子大学)
孫 珠熙 (奈良女子大学)	畠山 絹江 (神戸ファッション造形大学)	山本 和枝 (京都成安女子短期大学)
高橋 知子 (愛知家泉女子短期大学)	旗 美代子 (名古屋女子文化短期大学)	山本 高美 (和洋女子大学)
高橋 裕子 (川村学園女子大学)	服部由美子 (福井大学)	山本百合子 (福山市立女子短期大学)
高部 和子	羽生 京子 (和洋女子短期大学)	百合草孝子 (ノートルダム清心女子大学)
高部 啓子 (実践女子大学)	林 隆子	與倉 弘子 (滋賀大学)
高森 壽 (熊本大学)	林 仁美 (大阪夕陽丘学園短期大学)	横山 綏子 (飯田女子短期大学)
高山 朋子 (松山東雲短期大学)	原田 妙子 (名古屋女子大学)	吉田千恵子 (昭和学院短期大学)
田中 悦子 (山口県立新南陽高等学校)	日野伊久子 (昭和女子大学)	米川美津子 (文化服装学院)
田中 早苗 (東京家政大学)	平川 敬子 (熊本県立球磨工業高校)	渡邊 敬子 (京都女子大学短期大学部)
田中 美智 (川村学園女子大学)	福井 弥生 (徳島文理大学)	渡部 旬子 (文化女子大学)
田中 百子 (相模女子大学)	福尾 実千 (名古屋女子大学短期大学部)	
田中由佳里 (夙川学院短期大学)	福山 和子 (北星学園大学短期大学部)	(平成18年3月31日現在)
知念 葉子 (京都女子大学短期大学部 (非))	藤井 一枝 (島根県立島根女子短期大学)	
知野 恵子 (東京家政大学)	布施谷節子 (和洋女子大学)	
千葉 桂子 (福島大学)	別府 美雪 (共立女子大学 (非))	
千葉よう子 (仙台白百合短期大学)	堀尾 茂子 (県立広島大学)	

※ 変更があった場合にはすみやかに
 にお届けくださいますよう、
 お願い申し上げます。

平成 16・17 年度役員

部長 大村 知子 静岡大学
 副部長 富田 明美 椋山女学園大学
 猪又美栄子 昭和女子大学

運営委員

(庶務) 雲田 直子 東京家政大学
 (庶務) 大塚美智子 日本女子大学
 (庶務) 千葉 桂子 福島大学
 (会計) 田中 美智 川村短期大学
 (会計) 植竹 桃子 東京家政学院短期大学
 泉 加代子 京都女子大学
 小田巻淑子 東京田中短期大学
 岡部 和代 京都女子大学
 片瀬眞由美 金城学院大学
 金谷 喜子 大妻女子大学
 川上 梅 東京家政学院大学
 佐藤眞知子 文化女子大学
 鈴木 明子 広島大学大学院
 高部 啓子 実践女子大学
 服部由美子 福井大学
 原田 妙子 名古屋女子大学
 森 由紀 甲南女子大学
 (監事) 林 隆子
 (監事) 畠山 絹江 京都女子大学(非)
 (編集幹事) 薩本 弥生 横浜国立大学
 (編集幹事) 別府 美雪 共立女子大学(非)

事務局 〒422-8529 静岡市大谷 836
 静岡大学教育学部 被服学研究室
 TEL&FAX 054-238-4688
 E-mail ejtohm@ipc.shizuoka.ac.jp

平成 18・19 年度役員

部長 猪又美栄子 昭和女子大学
 副部長 泉 加代子 京都女子大学
 雲田 直子 東京家政大学

運営委員

(庶務) 田中 百子 相模女子大学
 千葉 桂子 福島大学
 森 由紀 甲南女子大学
 (会計) 布施谷節子 和洋女子大学
 呑山委佐子 大妻女子大学
 服部由美子 福井大学
 (企画) 佐藤眞知子 文化女子大学
 岡部 和代 京都女子大学
 原田 妙子 名古屋女子大学
 増田 智恵 三重大学
 (広報) 大塚美智子 日本女子大学
 鈴木 明子 広島大学大学院
 鳴海多恵子 東京学芸大学
 林 仁美 大阪夕陽丘学園
 短期大学
 (編集) 川上 梅 東京家政学院大学
 川端 博子 埼玉大学
 山本 高美 和洋女子大学
 (監事) 高部 啓子 実践女子大学
 金谷 喜子 大妻女子大学

事務局 〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7
 昭和女子大学生活科学部生活環境学科
 TEL 03-3411-4364 (直通)
 FAX 03-3411-6792 (学科教授室)
 E-mail inomata@swu.ac.jp

(社) 日本家政学会被服構成学部会入会申込書

No. _____

申込年月日		年	月	日	◎受付年月日		年	月	日	
1. ローマ字 氏名	氏				名					
	氏				名					
2. 西暦 19 年 月 日生				3. 男・女		4. 家政学会所属支部 支部				
5. 自宅住所	〒(-)				都・道・府・県					
	TEL.		— —		FAX.		— —			
	E-mail アドレス									
6. 勤務先・ 職名及び 所在地	勤務先				職名					
	〒(-)				都・道・府・県					
	TEL.		— —		FAX.		— —			
	E-mail アドレス									
7. 専 門	<研究分野>									
	<担当授業科目>									
8. 学 位 *	学士()				大学		年卒			
	修士()				大学		年修了			
	博士()				大学		年			
9. 所属学会										
10. 部会誌送付先		自宅 ・ 勤務先 (どちらかを○で囲む)								

* ()の中には、例えば、(家政学)のように学位の種別を記入してください。

◎ 事務局記入欄

ご記入の上、事務局までご送付ください。

部会費等は「お知らせ」ページの口座にお払ください。

編集後記

最近、5～7歳女兒にバーチャルで服を着せ替えて楽しむ筐体ゲーム機「オシャレ魔女ラブ&ベリー」が人気だそうです。子どもの被服・ファッションに関する意識が高まっているようです。また、上述のゲームと一緒に夢中になる母親も多いとのことで、親の子どものファッションへの意識の変化が伺えます。子供は自分のファッション嗜好が確立するまでに親の影響を受けますが、友達感覚の親子が増える傾向にある昨今、ちょうどその年頃の娘2人を持つ親としても、また、教員養成系の大学で家庭科教員を目指す学生を指導する立場でもファッション面の教育をどのように展開するか、悩ましいところです。

ところで、運営委員および編集幹事を4年間担当し、無事全うできたのは、部会長を始め運営委員、特に庶務の先生方や編集幹事の相方の先生、部会誌の執筆の先生方の協力のお陰です。この場を借りてお礼申し上げます。また、部会の活動を微力ながらお手伝いする中でいろいろと勉強させていただきました。ありがとうございました。

(Y. S.)

冬季オリンピックは、フィギュアスケートの荒川選手の金メダル獲得で閉幕しました。メダルの数は少なかったですが、選手達の満足した表情が印象的でした。国の代表なのでそれだけではいけないのかもしれませんが…。大変なこと、面倒なことを避けがちな人が多い中、好きなことに夢中になり努力を重ねることができることは、素晴らしいことだと再認しました。編集幹事としては、微力のため、庶務の先生方やS先生に頼りきった2年間でした。ありがとうございました。

(M. B.)

平成18年3月31日・発行

発行 (社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷所 (株) 第一印刷

TEL (045) 581-2201